

中等新國文法

上級用

4a
815
昭13

41877

教科書文庫

4
815
41-938
20000
81685

S13
1002

Kodak Gray Scale



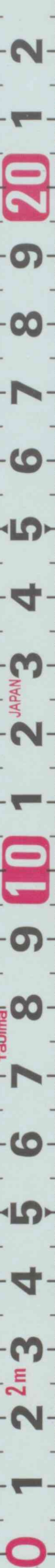
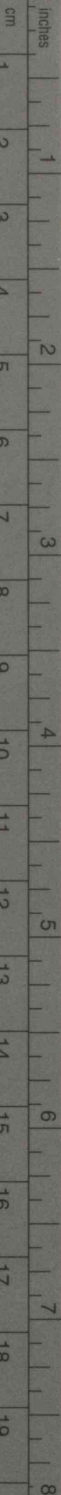
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

4a

815

昭13

中
三
運
用

24

形容詞
名詞

日三十月六年三十和昭
濟定檢省部文
科語國校學女等高・科文漢語國校學中

竹野長次著

中等新國文法

上級用

東京開隆堂



例言

本書は、昭和十二年三月改正された中學校高等女學校實業學校の教授要目に準據して、上級用の國文法教科書として編纂したものであります。

随つて本書では文語法の大要を説くのが目的であります。品詞論などは第一學年で教授されてゐるので、本書ではそれについては概説するに止め、文語の動詞の活用形容詞の種類形容動詞、助動詞、助詞について詳述し、更に文章論を説くことに致しました。

法則を教へるには記憶に訴へるより外に道はないのであります。然し實例によつて、幾度かその記憶を新に繰り返し

反覆熟達することが最も大切な事と存じます。この意味から練習の例文には實際に諸家の筆になつた文を多く引用しました。また文法の授業を多少なりと霑ひのある面白いものにしたといふ考から、例文には文學的なものを選びました。

本書の編纂には平易簡潔を主としたと共に、生徒の理解記憶に便する爲に秩序立つた組織を與へました。

昭和十二年九月

著者しるす

中等新國文法 上級用

目次

第一編	品詞總論	一
第一章	品詞概説	一
第二章	品詞の轉成	一四
第三章	單語の構成	三
第二編	品詞各論	三
第一章	動詞の活用と種類	三
第二章	形容詞の活用	五〇
第三章	形容動詞	五五
第四章	用言の音便	五九

第五章	助動詞の種類	一五
第六章	助動詞の接續	一七
第七章	助動詞の活用	一八
第八章	助詞の用法	六
第三編 文章論		
第一章	主語・述語・補語	九
第二章	修飾語	一〇
第三章	提示語と獨立語	一六
第四章	文の成文の位置	二二
第五章	文の成分の省略と併置	二五
第六章	節	三三
第七章	文の構造上の種類	三七
第八章	文の性質上の種類	三三

中等新國文法 上級用

第一篇 品詞總論

第一章 品詞概説

文と語 言葉が結合して一つの纏つた思想を表現してあるものを文又は文章といふ。例へば

櫻咲く門に日章旗ひるがへる

は、それだけで「何がどうする」といふ纏つた思想を表はして

單語

獨立語と附屬語

品詞

あるから、文である。思想が一つの纏つた表現をする爲には、叙述の題目となる部分と、題目がどうしたかを述べる叙述の部分とが必要である。さて文は個々の言葉から成立つてゐる。その個々の言葉にはそれ／＼の意味がある。この個々の言葉を語又は單語といふ。

單語の中には、櫻「咲く」門「日章旗」翻るなどの如く、それ自身で一つの獨立した意味を表はしてゐる獨立語と、門「に」の如く、獨立しては意味をなさないが、他の語に附屬して、それと共に用ひられる附屬語とがある。

單語と品詞 單語を文法上の性質によつて左の九種に分類する。分類した各々を品詞といふ。

品詞の種類

名詞

數詞

名詞 代名詞 動詞 形容詞 形容動詞 副詞

助動詞 助詞 接續詞 感動詞

名詞 「東京」「大阪」「豊臣秀吉」「西郷隆盛」「鳥花」「桔梗」「女郎花」の如く、地名・人名・その他すべての事物の名を表はす語を名詞といふ。

「一つ」「二つ」「五里」「十人」「八冊」などの如く、事物の數量を表はす語や、「二日目」「第一回」「第三卷」「一番」「三號」などの如く、事物の順序を示す語も名詞である。これを特に數詞といふ。

(名詞には「櫻」「松」の如く同類のものに共通に用ひられる普通名詞と、「東京」「西郷隆盛」の如く、特に一つのものに限つて用ひられる固有名詞とがある。然し吾國の文法では、名詞にこの區別をする必要がない。)

(數詞の「一つ」「二つ」「十のつち」や、「十人」「八冊」などの「人」「冊」は數の觀念を表はす部

代名詞

分の「ひと」は「た」「八」に附屬してゐる接尾語で、これを助數詞といふ。
代名詞 名詞の代りに用ひられる語を代名詞といふ。
代名詞には、「われ」「汝」「彼」の如く人名の代りに用ひられる人代名詞と、「これ」「それ」「こゝ」「そこ」などの如く事物・場所などの名の代りに用ひられる指示代名詞とがある。

人代名詞は、指す人の位置によつて、**自稱**・**對稱**・**他稱**・**不定稱**の四つにわけ、**指示代名詞**は指示する種類によつて**事物**・**場所**・**方向**の三種に分け、更にそれらを距離の遠近によつて**近稱**・**中稱**・**遠稱**・**不定稱**の四つに分ける。

人代名詞

自稱 對稱 他稱 不定稱

人代名詞
指示代名詞

われ 汝 彼 たれ

指示代名詞

		事物		近稱
	場所	こゝ	そこ	中稱
方向		あそこ	いづこ	遠稱
		いづれ		不定稱
		こち	そち	
		こなた	そなた	
		あち	どち	
		あなた	いづち	
		あなた	いづかた	

人代名詞・指示代名詞の**不定稱**は、**人事物**・**場所**・**方向**の明かでない時に用ひるのであるが、また疑はしい場合にも用ひ

動詞

られ、また
 誰も手に汗を握らざるはなし
 いづれも美し
 いづこも霞み渡る
 いづかたも秋の風吹く
 の如く「も」をつけて總括していふ場合にも用ひられる。
 また指示代名詞の「これ」「それ」は人代名詞としても用ひられる。

(名詞代名詞には活用がない。これらを一括して體言といふ。文の主語には名詞代名詞の用ひられることが多い。)

動詞 「飛ぶ」「走る」「聳ゆ」「似る」「有り」の如く、事物の動作・状態（大）存

自動詞
他動詞

在を表はす語を動詞といふ。

動詞には、

雨降る 花咲く 鳥鳴く

の如く、動詞の作用がそのものだけにとどまつて、その作用を受けるものを要しないものと、

風花を散らす 月荒野を照らす

の如く、動詞の作用がその作用を受ける目的格を必要とするものとの二種がある。前者を自動詞といひ、後者を他動詞といふ。

形容詞 「美し」「淋し」「樂し」の如く、事物の性質や状態を表はす語を形容詞といふ。

形容詞

形容動詞

〔美しき花〕淋しき空、寒き空の如く、形容詞は體言の上について、その體言を修飾することもある。

形容動詞 形容詞の美しく、淋しく、副詞の靜かに、親切に

悠々と、毅然となどいふ語が、動詞の「あり」と合して約まり、美しかり、淋しかり、靜かなり、親切なり、悠々たり、毅然たりとならる。これらの語は形容詞と同じ性質の語で、然もラ行變格の動詞と同じ形式の活用をする。これを形容動詞といふ。

〔動詞形容詞形容動詞はみな活用がある。これらを總括して用言といふ。これらの用言は單獨で述語となることが出来る。〕

副詞

副詞 靜かに、極めて、徐ろに、微かにの語は、

靜かに歩む、極めて長し、徐ろに語る、微かに見ゆ

の如く、歩む、長し、語る、見ゆなどいふ用言の意味を修飾限定するに用ひられる。また

頗る親切に世話をす、や、暫く休む

の文で、頗る、や、は、他の副詞、親切に、暫くの意味を修飾限定してゐる。斯く用言又は他の副詞の意味を修飾限定する語を副詞といふ。

〔副詞には活用がない。また主語として用ひられることもない。〕

〔副詞は普通修飾される語のすぐ上にあるのであるが、時には修飾される語との間に他の語句を挟んでゐる場合がある。靜かに彼は答へぬ、徐ろに汽車は送り出しぬ。〕

助動詞

助動詞 「雨降らむ」「花散りぬ」の「む」「ぬ」の如く、動詞に附いて

その叙述を助けたり、彼は日本男子なり「臣、臣たり」の「なり」たる如く體言に附いて之に叙述の意味を加へたりする語を助動詞といふ。

助動詞は必ず他の語に附屬してその語と共に用ひられ、單獨では意味をなさない。

(助動詞には活用がある。)

助詞

助詞 「花の枝」東に向ふ「風さへ吹く」の「に」「さへ」の如く、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示したり、或は之に或る意味をいひ添へたりする語を助詞といふ。

助詞は必ず他の語に附いて、それと共に用ひられ、單獨では意味がない。

接續詞

(助詞には活用がない。)

接續詞 「山又山を越ゆ」風吹き且雨降る「日は暮れぬ。されど家路は遠し」の「又」「且」「されど」などの如く、語と語、句と句、文と文とを接續する語を接續詞といふ。

接續詞には

山を越え又野を行く。英國及び米國に遊ぶ。京都に遊びついで奈良に行く。

の如く、物事を累加する爲に用ひられるものと、

雲かはた山か。

この夏は温泉或は海邊に行かんと思ふ。
の如く、事物を選択する意を表はすものと、

風吹く。されど寒からず。

彼は運動家なり。然し健康は餘りすぐれず。

の如く、前文を受けてそれと一致しない事情を述べる場合に用ひられ、また

風強し。されば歩行に悩む。

路闇く、爲に會ふ人の顔も見えず。

の如く、前文をうけて、當然の結果を述べる場合に用ひるものなどがある。

接續詞には右に擧げた外に、並びに「尙」「但し」「然らば」「然るに」「故に」「随ひて」「因りて」「しかのみならず」「しかれども」「然しながら」などの語がある。

（接續詞には活用がない。また接續詞は主語・述語・修飾語としては用ひられない。

感動詞

感動詞 「あゝ」「あはれ」「あはや」「すは」などの如く感動の情を表はす語や、「はあ」「いな」などの如く應答に用ひる語、又は「やよ」「いざ」「もし」などの如く呼びかける場合に用ひられる語を感動詞といふ。

感動詞は

あゝ、悲しいかな。すは敵兵ぞ。いざ行かん。
いな知らず。

の如く、文の冒頭についてゐることが多い。

（感動詞には活用がない。また主語・述語・修飾語として用ひられることが

ない。

練習

- 次の文を單語に分け、各々の品詞をいへ。
- (1) 天に一片の雲なき夕立つて伊豆の山に落つる日を望む。
 - (2) あはれ世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。
 - (3) 落日は海に流れて海上の舟は皆金光を放つ。
 - (4) 然らば信用ある人とは如何なる人ぞ。
 - (5) 村雨折々はら／＼と音をたて、機の落葉の上に濺ぐ。
 - (6) 戸を開きてやれば、鳥は暫く自由の身となるべきを喜びて鳴き立つ。

第二章 品詞の轉成

品詞の轉成

前章に述べた如く、品詞は九種類に分けるのであるが、

山々霞む 風光る 空曇る

などの「霞む」「光る」「曇る」といふ動詞は、

霞をわけ行く。光を放つ。曇を拭ふ

の如く、名詞としても用ひられる。かく或る品詞に屬する

語が、用ひかたによつては他の品詞となることがある。こ

れを品詞の轉成といふ。

品詞の轉成には左の種類がある。

(一) 動詞・形容詞から名詞に轉じるもの。

霞かすみ 光ひかり 曇くもり 休やすみ 働はたらき 眺ながめ 謠うたひ
 多く(多くの人) 遠く(遠くを見る)

の如きがそれである。そして動詞は普通にはその連用形

品詞の轉成の種
類
轉成の名詞

轉成の代名詞

から名詞に轉じるのであるが、また
 向ふの村 相撲 守(人名) 順(人名)
 の如く動詞の終止形からも名詞に轉じ、
 あな、面白おもしろのけしきや
 の如く、形容詞はその語幹が名詞となる。
 (二) 名詞から代名詞に轉じたもの
 はからざりき、君と旗鼓の間に相まみえんとは。
 わらはははさることありとも知らず。
 の文の「君」わらははは、本來名詞であつたのが、代名詞として用
 ひられてゐるのである。この外、閣下「僕」なども皆名詞から
 轉じたものである。

轉成の動詞

(三) 名詞・形容詞から動詞に轉じたもの
 装束さうぞくきて 敵てき對たいひて 彩色さいしきて 退治たいぢる(口)
 彌や次じる(口)

の如きは皆名詞から轉じたものである。そして「装束」敵對「彌
 の如きは、漢語の末の音を活用させたものであり、「退治」彌
 次」は漢語に「行」の音を添へて活用させたものである。
 また

惜おししむ 悲かなしむ 樂たのしむ

の如きは、形容詞の語幹に「マ」行の音を添へて活用させたも
 のである。

(四) 名詞・動詞・副詞から形容詞に轉じたもの

轉成の形容詞

大人おとなし 言ことまことし
 の如きは、名詞に「し」といふ活用語尾がついて形容詞となつたものであり、
 望まし 願はし 慕はし 痛まし
 の如きは、動詞の未然形に「し」といふ活用語尾がついて形容詞となつたものであり、
 甚こだし 未なだし いととぶし うべべくし
 の如きは副詞に「し」といふ活用語尾が附いて形容詞となつたものである。 なほまた、
 明あきらけし 遙はるかけし 爽さわけし
 の如く、明か「遙か」爽か「の」か「け」に轉じ、それに活用語尾の「し」

がついて形容詞となつたものもある。

(五) 名詞・動詞から副詞に轉じたもの

つゆ知らず ゆめ怠るべからず 多分たぶん天氣ならん
 の如きは、名詞から副詞となつたものであり、

あまり早し つまり勝つ(口)

の如きは動詞の連用形が轉じて副詞となつたものである。

この外

時々 折々 とりく 行くく 見すく

の如く名詞や動詞の連用形或は終止形を重ねた語は副詞として用ひられる。

(六) 名詞・動詞・副詞から接續詞に轉じたもの

轉成の副詞

轉成の接續詞

轉成の感動詞

健在に有之候間御安心下され度候

東京及び京都は繁華の地なり

山を越えまた山を迎ふ

の「間」は名詞から、及びは動詞の連用形から、または副詞から轉じて接續詞となつたものである。殊に接續詞は副詞から轉じたものが多く、なほ「また」「すなはち」「はた」「或は」「且」などの語は皆副詞としても用ひられ、文中に在つて、副詞か接續詞か見分けに苦しむこともある。

七) 代名詞、副詞から感動詞に轉じたもの

それ見よ、わが言ひし如くなるを

いかに正行、わが言ふを聞け

の「それ」は代名詞から、いかに「は」副詞から轉じて感動詞となつたものである。口語の「どれ立たうの」「どれ」は代名詞から來たものであり、「ちよつと君待ち給へ。」「の」「ちよつと」などは副詞から來たものである。

練習

次の文中、轉成の品詞を指摘し、何から轉じたかをいへ。

- (1) をりく、時雨しめやかに林を過ぐ。
- (2) 雪どけの滴聲軒をめぐる。
- (3) 面白の春の夜や、月おぼろにかすむ。
- (4) 道行く多くの人は夏服にかはりぬ。
- (5) 夕方日影りてより郊外に出づ。
- (6) 勇ましき皇軍の戦士よ。
- (7) 長々しき患ひもやうやくいえぬ。

- (8) 彼は無言にて餘り多くを語らざりき。
- (9) 林を渡る風の音さやけし。
- (10) 朝日薄く南の窓を射、忽ちまたくもる

第三章 單語の構成

單語の構成

單語はそれごとく一つの品詞であるが、その單語が更に他の單語と合して一つの新しい單語を作ることがある。例へば「松」といふ名詞に「山」といふ名詞が合して「松山」といふ新しい名詞を作り、「春」といふ名詞に「めく」といふ語が附いて「春めく」といふ新しい動詞を作る。これを單語の構成といふ。この單語の構成には四種ある。

熟語

(一) 熟語 異なる二つ以上の語が合して新しい意味の語を構成してあるもので、種類は名詞代名詞動詞形容詞副詞、接續詞の各々に亘り、それを構成する語の組合せも様々である。

熟語の名詞

1. 熟語の名詞

名詞と名詞	山里	竹竿	月夜
動詞の連用形と名詞	落葉	歸路	枯草
名詞と動詞の連用形	物語	櫻狩	朝起
動詞の連用形と動詞の連用形	飲食	弾き語り	投賣
形容詞の語幹と名詞	淺瀬	黒駒	嬉し涙
形容詞の語幹と動詞の連用形	苦笑	嬉し泣	薄曇
形容詞の語幹と形容詞の語幹	遠淺	薄青	白黒

熟語の動詞

副詞と名詞

たゞ者 また從兄

(名詞と名詞との結合の中には、數詞と名詞と合した「三軒長屋」「二本松」の如きものもある)

2. 熟語の動詞

名詞と動詞

木傳ふ 名づく 旅立つ

動詞の連用形と動詞

咲き初む 燃え上る 浸み込む

形容詞の語幹と動詞

近寄る 遠退く 薄曇る

(熟語の動詞は必ず動詞の上に他語が結合してゐる)

3. 熟語の形容詞

名詞と形容詞

心易し 名高し 心よし

動詞の連用形と形容詞

恐れ多し 見憎し 聞き苦し

熟語の形容詞

熟語の副詞

形容詞の語幹と形容詞 薄暗し 熱苦し 青白し

(熟語の形容詞は必ず形容詞の上に他語が結合したものである)

4. 熟語の副詞

熟語の副詞はその組合せが種々雑多で、概括して規則を立てることはむつかしいが、次のやうなものがある。

名詞と助詞

誠に もとより

代名詞と助詞

なにとぞ

動詞と助詞

果して しきりに 却つて

動詞と助動詞

成るべく

5. 熟語の接續詞

接續詞はその大部分が二つ以上の語の結合から成立つてゐる。例へば「並びに」「然らば」の如き

熟語の接續詞

熟語を構成する語の音の變化

は動詞と助詞と合したものであり、但し「しかも」の如きは副詞と助詞と結合したものである。熟語を構成してある下の語の頭音が、カ行・サ行・タ行・ハ行の音である時は、その音が濁音になる。これを連濁といふ。例へば、

朝霧(あさぎり) 見苦し(みぐるし)

山崎(やまざき) 遠離る(とほざかる)

山鳥(やまどり) 浅漬(あさづけ)

落葉(おちば) 長引く(ながびく)

の如きである。

熟語を構成してある上の語の語尾が、エ段の音である時

は、ア段の音に變ることがある。例へば

酒屋(さかや) 竹叢(たかむら)

風聲(かざこゑ)

船遊び(ふなあそび) 胸苦し(むなぐるし)

雨乞ひ(あまごひ) 爪突く(つまづく)

村雲(むらぐも) 荒野(あらの)

の如きものである。

(二) 疊語 同一の單語を重ねたもので、名詞・代名詞・形容詞・

副詞・感動詞の各品詞にわたつてゐる。

1. 疊語の名詞

山々 人々 隅々 村々

疊語の名詞

疊語

疊語の動詞

2. 疊語の代名詞
われく、誰々、それく

疊語の形容詞

3. 疊語の形容詞
軽々し、長々し、苦々し

疊語の副詞

4. 疊語の副詞
泣くく、年々、疾くく

疊語の感動詞

5. 疊語の感動詞
あゝ、いでく、いざく

(疊語の形容詞「軽々し」「長々し」「苦々し」などは、形容詞の語幹の重つたものに活用語尾「し」がついたものである)

(疊語の形容詞はシク活用に活用する)

疊語を構成する語の音の變化

疊語を構成する語の頭音が、カ行・サ行・タ行・ハ行の音である時は、下に來る語の頭音を濁ることがある。

軽々し(かろがろし) 月々(つきづき) 隅々(すみずみ)
然々(しかじか) 時々(ときどき) 節々(ふしぶし)

(熟語及び疊語を複合語ともいふ)

(三) 接頭語の附いたもの 單獨に用ひられず、他の語の上に附いて一語を成すものを接頭語といふ。左に接頭語を掲げ、それと結合してゐる單語の例を示す。

(接頭語には、意味がなく、單に語調を強めてゐるものと、意味を添へてゐるものとの二種ある)

た 靡く た 走る 易し

1. 意味を強める
2. ...を添へる

を	を野	を山田	を山
み	み雪	み吉野	み山
さ	さ夜	さ苗	さ蓆 <small>むしろ</small>
け	け近し	けうとし	けにくし
か	か弱し	か細し	か黒し
うち	うち見る	うち渡す	うち切る
とり	とり装ふ	とり持つ	とり巻く
かき	かき曇る	かき拂ふ	かき取る
もて	もて悩む	もて扱ふ	もて煩ふ
さし	さし向ふ	さし昇る	さし控ふ
たち	たち昇る	たち退く	たち歸る

おし	おし廣む	おし返す	おし立つ
もの	もの悲し	もの淋し	
うひ	うひ陣	うひ孫	うひ産
はつ	はつ冬	はつ雪	はつ舞臺
おほ	おほ君	おほ殿	
お	お手紙	お手洗	
ま	ま心	ま草	ま木
す	す足	す顔	す手
ふぶ	ふ風流	ふ行届き <small>(口)</small>	

(四) 接尾語の附いたもの 單獨に用ひられず、他の語の下に附いて一語を成すものを接尾語といふ。左に接尾語の

重なるものをあげて、他語と合してゐる例を示すことにす
る。

み 赤み 面白み 憎しみ

さ 深さ 廣さ 厚さ

〔み〕さは形容詞の語幹について、それを名詞とするのであるが、〔さ〕はまた漢語や名詞にもつらなつて、綿密さ、親切さなどともなる。

めく 春めく 子供めく 時めく

ぶ 田舎ぶ 翁ぶ 雅ぶ

がまし 隔てがまし 議論がまし をこがまし

〔めく〕ぶがましは名詞につく。めくの他動詞にめかすがあり、またぶ(上二段)と同じ語で四段に活用するぶるがある。時めかす「聖人ぶる」「上品ぶる」など用ひる。

がる 淋しがる 寒むがる 残念がる

〔がる〕は形容詞の語幹又は漢語につらなつて、思ふといふ意を添へる。

げに 飛立ちげに きよげに うれしげに 迷惑げに

〔げ〕には口語の「さうに」の意で、動詞の連用形形容詞の語幹漢語などにつらなる。

右の外、接尾語には複數の意を表はすが、たたちらども等がある。

練習

次の文から熟語・疊語・接頭語・接尾語を取り出せ。

(1) 花蓮は花の中の王ともいふべくや。曉の星のうする、頃霞たちこむる中に花を開く。

(2) 風ざわ／＼と高き梢に騒ぐ。

- (3) 路は谷川に添うて一廻轉す。
- (4) 野に出づれば薄寒き風吹き、うら淋しく見渡す限り青色なし。
- (5) 湖の面は月光をうけて青白く光り、周囲の山々は薄絹につゝまれて模糊たり。
- (6) 海邊に出づれば、いつも有り來りの風景に接して、別に珍しからねど、家にゐて浪の音を聞けば、海はさま／＼の意味にて冥想を誘ふ。
- (7) 日の落ちたる後は富士も程なく蒼ざめ、日の忘形見とも思ふ明星は暮れゆく西の空に眼を開く。
- (8) 太陽は別れ行く世を顧みがちに落ち行く。
- (9) 雲雀は冴えかへる初春の空に白光りする羽ばたきして鳴く。
- (10) 庭の梅の花の雪とこぼるゝあたりに、耳珍しく藪鶯の初音響く。

第二篇 品詞各論

第一章 動詞の活用と種類

動詞の活用
活用形

語尾
語幹

動詞はその用ひ方によつて語形を變化する。例へば「飛ぶ」といふ動詞は、飛ば・飛び・飛ぶ・飛べと變化する。この語形の變化を動詞の活用といひ、變化した各々の形を動詞の活用形といふ。

動詞でその語形の變化する部分は、語の末の部分だけである。この變化する部分を語尾といひ、變化しない部分を語幹といふ。「飛ぶ」といふ動詞ではその語幹は「と」であり、語尾は「ぶ」である。

動詞の活用形の種類

動詞の語尾變化は、語尾の音の屬する、五十音圖中の同行の間に行はれ、決して他行にはわたらない。

動詞の活用形には左の六種がある。

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形

動詞はその語尾變化の形式が必ずしも同じではない。

いまその活用の種類を左の九種に分ける。

○四段活用 ○上二段活用 ○下二段活用 上一段活用

下一段活用 ○カ行變格活用 ○サ行變格活用 ナ行

變格活用 ラ行變格活用

四段活用 「讀む」といふ動詞は、

本を讀まん (未然形)

動詞の活用の種類

四段活用

本を讀みたし (連用形)

本を讀む (終止形)

本を讀む人 (連體形)

本を讀めども心さびし (已然形)

本を讀め (命令形)

の如く、マ行のまみむめに活用する。斯く五十音圖のアイウエの四段に活用するものを四段活用、略して四段といふ。

行	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	退	か		き	く	く	け	け
サ	落	さ		し	す	す	せ	せ
タ	打	た		ち	つ	つ	て	て

ハ	マ	ラ
洗	勇	走
は	ま	ら
ひ	み	り
ふ	む	る
ふ	む	る
へ	め	れ
へ	め	れ

(文語の四段活用の動詞は、カ・サ・タ・ハ・マ・ラの六行に亘つてある。但しカ行ハ行には「仰ぐ」忍ぶの如く濁音の語がある。)

上二段活用

上二段活用 「起く」といふ動詞は、

朝早く起きん

(未然形)

朝早く起きたし

(連用形)

朝早く起く

(終止形)

朝早く起くる人

(連體形)

朝早く起くれども既に遅し (已然形)

真中より上ニフ

動詞に「ま」ついで「か」上ニ

生き 満

朝早く起きよ

(命令形)

の如く、カ行のきくに活用し、更に「く」に、るれが添つてゐる。斯く五十音圖のイウの二段に活用し、そのウ段の音に、更に、るれの添つてゐるものを上二段活用、略して上二段といふ。上二段活用の動詞は口語では上一段活用になる。

行	カ	タ	ハ	マ	ヤ
語幹	生	満	戀	試	老
語尾	き	ち	ひ	み	い
未然	き	ち	ひ	み	い
連用	き	ち	ひ	み	い
終止	く	つ	ふ	む	ゆ
連體	くる	つる	ふる	むる	ゆる
已然	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ
命令	きよ	ちよ	ひよ	みよ	いよ

ラ	懲	り	り	る	るる	るれ	り(よ)
---	---	---	---	---	----	----	------

(文語の上二段活用の動詞は、カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行にある。但し、力行タ行ハ行には「過ぐ」「耻づ」「綻ぶ」などのやうに濁音の語がある。)

(用ふ「試む」は上二段の外に、「用ゐる」「試みる」の如く、ワ行・マ行の上一段にも活用する。また「恨む」は上二段の外に、「恨まず」の如く四段にも許容されてゐる。)

老や、悔み、報や

下二段活用 「受く」といふ動詞は、

賞を受けん (未然形)

賞を受けたし (連用形)

賞を受く (終止形)

賞を受くる人 (連體形)

賞を受くれども誇らず (已然形)

老や、悔み

イウエオ

若狭語

行	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ア	(得)	え	え	え	う	うる	うれ	えよ
カ	助	け	け	け	く	くる	くれ	けよ
サ	寄	せ	せ	せ	す	する	すれ	せよ
タ	育	て	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ナ	尋	ね	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ

賞を受けよ (命令形)

の如く、力行のくけに活用し、更に「く」に「るれ」が添つてゐる。斯く五十音圖のウエの二段に活用し、更にウ段の音に「るれ」の添つてゐるものを、下二段活用、略して下二段といふ。下二段活用の動詞は口語ではみな下一段活用となる。

ナ	(似)	に	に	に	に	に	に	に	(よ)
ハ	(乾)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひれ	ひ	(よ)
マ	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みれ	み	(よ)
ヤ	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いれ	い	(よ)
ワ	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐれ	ゐ	(よ)

(上一段の動詞はカ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの六行にある。文語の動詞でこの段に属するものは甚だ尠なく、着る、似る、煮る、乾る、喫る、見る(惟みる、顧みる、試みる、鑑みる)射る、鑄る、沃る、居る(率ある、用ゐる)等である。然も皆語幹がそのまゝ活用形となつてゐる。)

①三行 ②三行 ③三行 ④三行 ⑤三行 ⑥三行 ⑦三行 ⑧三行 ⑨三行 ⑩三行

下一段活用

下一段活用 「蹴る」といふ動詞は、

- 蹴を蹴ん (未然形)
- 蹴を蹴たじ (連用形)

- 蹴を蹴る (終止形)
- 蹴を蹴る人 (連體形)
- 蹴を蹴れども揚がらず (已然形)
- 蹴を蹴よ (命令形)

の如く、カ行の「け」と「け」に「れ」が添つてゐる。斯く五十音圖の工段の一段の音とそれになる「れ」の添つてゐるものを、下一段活用、略して下一段といふ。

行	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)

(下一段活用の動詞はカ行に「蹴る」の一語があるだけである。)(口語では蹴るは四段に活用する。)

カ行變格活用

カ行變格活用

「來」といふ動詞は左表の如く活用する。

語幹 來	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
		こず	きた	く	くる人	くれば	こよ

即ちカ行の、こきくの三段に活用し、更に「く」に、るれが添つてゐる。これをカ行變格活用といひ、又はカ變といふ。この活用に屬するものは「來」の一語だけである。

サ行變格活用

サ行變格活用

「爲」といふ動詞は左表の如く活用する。

語幹 爲	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
		せ	し	す	する人	すれ	せよ

即ちサ行の、せしすの三段に活用し、その「す」に、るれが添つて

ゐる。これをサ行變格活用、略してサ變といひ、「爲」の一語だけである。

但し名詞漢語形容詞その他の語と、この「爲」とが結び付いて出來た、枕す罪す發す勉強す高くす全くす空しくすよみす重んず明かにす先んず諳んず等の語は皆サ行變格に活用する。

ナ行變格活用

ナ行變格活用

「死ぬ」といふ動詞は左表の如く活用する。

語幹 死	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
		な	に	ぬ	ぬる人	ぬれ	ぬ

即ちナ行の、なにぬねの四段に活用し、その「ぬ」に、るれが添つてゐる。これをナ行變格活用、略してナ變といふ。この活

ラ行變格活用

用に屬する動詞は、**死ぬ**、**往ぬ**の二語である。

口語では「死ぬ」は四段に活用し、「往ぬ」は用ひぬ。

ラ行變格活用 「有り」といふ動詞は左表の如く活用する。

	語幹	語尾				
有	ら	未然	連用	終止	連體	已然
			り	り	る	れ
						れ
						れ

即ちラ行の、らりるれの四段に活用し、一見四段活用に似てあるが、四段活用では終止形が「る」になつてゐるのを、この活用では「り」になつてゐるのが異なる。これをラ行變格活用、略してラ變といふ。この活用に屬する語は有り、居り、侍りの三語だけである。

ラ變の動詞は口語では、四段に活用する。

(動詞の中で、下一段と各變格活用の動詞は少數であるから記憶出来るが、その他の動詞でその何活用かを見わけるときは、動詞の語尾に打消の「ず」と未來の「む」とをつけて意味の通じる音の段がア段であれば四段イ段であれば上二段か上一段エ段であれば下二段である。)

練習

次の文から動詞をとり出し、その活用の種類及び活用形をいへ。

- (1) 春の風の吹く所、そこに淡雪消えて若菜萌え、谷川の氷解けて、波の花まぶ咲く。
- (2) 人は花に送られ、花に迎へられ、心自らのどかなり。
- (3) 青空は庭の外に擴がり、雲行き鳥翔るさまもいと豊かに眺めらる。
- (4) 黄なる蝶の飛び來りて、垣根に花をあさるを見る。
- (5) げんげの花盛り過ぎて、時鳥の空に音づる頃、は、赤き薔薇、白き薔薇咲きみつ。
- (6) 彼は葉鶏頭一本引きさげて來、手づからわが庭に植ゑて往ぬ。

形容詞の活用

第二章 形容詞の活用

形容詞は動詞と同じくその語形を變化する。「寒し」といふ語は、

風寒く吹く

吹く風寒し

風寒き朝

風寒けれども雪降らず

などとなる。即ち、語尾がくしきけれと變化するのである。この語形の變化を形容詞の活用といひ、變化した形を形容詞の活用形といふ。そして變化しない部分を語幹、變化す

活用形
語幹

語尾

活用形の種類

る部分を語尾といふ。

形容詞の活用形は左の五種である。

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形

形容詞の活用にはク活用とシク活用との二種がある。

ク活用 「清し」といふ語は、

水清くば魚棲まじ (未然形)

水清く流る (連用形)

水の流れ清し (終止形)

清き水の流れ (連體形)

水清けれども汲まず (已然形)

の如く、くしきけれと活用する。これをク活用といふ。

活用の種類

ク活用

シク活用

シク活用 「淋し」といふ語は、

風淋しくば草木も咽はん (未然形)

風淋しく吹く (連用形)

吹く風の聲淋し (終止形)

淋しき風の聲 (連體形)

吹く風淋しけれども浪音騒し (已然形)

の如く、く・○きけれと活用し、終止形は語幹の「淋し」をそのまま用ひてゐる。これをシク活用といふ。

口語ではく・いけれと活用し、ク活用・シク活用の區別がない。

(形容詞を見分けるには、語を言ひ切つて見る、その時「花美し」「風寒し」の如

形容詞活用表

種類	語幹		語尾	
	清	濁	未然	連用
ク活用	清	濁	未然	連用
シク活用	淋	し	く	し
			き	き
			けれ	けれ

(シク活用では語幹を終止形として用ひる。)

形容詞の語幹は、面白の夜有難の世怪しのものなどの如く用ひられ、またみさげにの如き接尾語がついて、深みなし面白み多し苦しきに堪ふをかしさをしのぶ悲しげに泣く嬉しげに語るの如く用ひられる。

形容詞の語幹

名詞

副詞形

形容詞の連用形は「清く流る」「楽しく遊ぶ」の如く動詞の意味を限定する時にも用ひる。この場合の形を副詞形ともいふ。

練習

- 次の文から形容詞をとり出し、その活用の種類及び活用形をいへ。
- (1) 余は夏の草花を愛す。淡くさびある色よりも濃く強き色の花を愛す。
 - (2) 苔屋どもに岩海苔のかほりせるもをかしく、芦の屋に心細く立ち昇る煙ものどかなりや。
 - (3) 初島わたり漕ぐ舟うたの寄る浪ごとに聞ゆるも床しく、砂白く松青きほとり濱千鳥のむれ飛ぶさまも面白し。
 - (4) 清濁併せ呑むといふこと、耳の痛きほど聞きて知り居れど、わが雅量狭ければ、異を嫌ひ非を悪みて、自ら世を窄くす。耻じきことなり。
 - (5) 夕方、樺色の雲、西の空に浮びて、鯛の聲すゞし。

第三章 形容動詞

形容動詞

形容詞と同じ性質の語で、然も動詞と同じ形式の活用をするものを形容動詞といふ。形容動詞は一つの熟語で、それを構成してある語の性質によつて三種に分ける。

第一種形容動詞

第一種の形容動詞 形容詞の連用形例へば「清く」「涼しく」が動詞の「あり」と結合し、「清かり」「涼しかり」となつたものといふ。この場合「くあり」が約つて「かり」となつたのである。

多かり 長かり 重かり 難かり 寒かり 嬉しかり
樂しかり 美しかり 香しかり

第二種形容動詞

第二種の形容動詞 「靜かに」「爽かに」などいふに「といふ助

詞をもつてある副詞が動詞の「あり」と合して、「静かなり」「爽かなり」となつたものをいふ。この場合に「あり」が約つて「なり」となるのである。これを表に示すと左の通りである。

生憎にあり	生憎なり	明らかにより	明らかかなり
優にあり	優なり	安らかにあり	安らかかなり
平らにより	平らなり	華やかにあり	華やかかなり
清らにより	清らなり	若やかにあり	若やかかなり
長閑かにあり	長閑なり	怪しげにより	怪しげなり
遙かにあり	遙かなり	樂しげにより	樂しげなり

第三種形容動詞

第三種の形容動詞

「悠々と」「堂々と」の如く」といふ助詞

をもつ漢語が、動詞「あり」につづいて「悠々たり」「堂々たり」となつたものをいふ。「とあり」が約つて「たり」となつたのである。

髣髴たり 淋漓たり 燦たり 寂たり 欣然たり 悠
然たり 渺々乎たり 躍如たり 自若たり

形容動詞は、形容詞・副詞・漢語などが動詞の「あり」に結合して出来たものであるから、「あり」の活用に從つて、ラ行變格に活用する。

口語にはこの第三種の形容動詞はない。

種類	第一種		第二種		第三種	
	語幹	語尾	優な	華やかな	堂々た	悠然た
未然	ら	ら	ら	ら	ら	ら
連用	り	り	り	り	り	り
終止	り	り	り	り	り	り
連體	る	る	る	る	る	る
已然	れ	れ	れ	れ	れ	れ
命令	れ	れ	れ	れ	れ	れ

練習

次の文から形容動詞をとり出し、構成してゐる原語について述べよ。

(1) 皎々たる月、中天にかゝり、風死し、夜氣静かなり。

(2) 長閑なる春は、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、春風駘蕩たり。人の心また自ら晴やかに。

(3) 習々たる東風、面を吹いて寒からず。

(4) 梅の花は冷やかなり、櫻の花は豊艶なり、然して春に魁けて咲く福壽草は可憐なり。

(5) そぼ降る雨に、黄塵收まり、天地自らしめやかに。

第四章 用言の音便

用言の音便

用言が他の語につらなる時は、發音の都合上、或る音が他の音に變り、假名をも發音のまゝに書き換へることがある。之を音便といふ。

動詞の音便

四段活用、及びナ行變格、ラ行變格活用の動詞が、てに連る時は、その語尾の音が他の音に轉じる。

動詞の音便

動詞のイ音便

ことがある。之を動詞の音便といひ、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種ある。

イ音便 カ行・ガ行・サ行四段活用の動詞がてに連る時、その連用形「きぎし」が「い」となる。例へば、

泣きて歸る が 泣いて歸る

漕ぎて行く が 漕いで行く

傘さして行く が 傘さいて行く

となる如きである。そしてガ行の「ぎ」が「い」となる時は、「て」は濁音となるのが例である。

(サ行の動詞で「し」が「い」音便になる語は非常に少ない。)

動詞のウ音便

ウ音便 ハ行四段活用の動詞がてに連る時は、その連用

形の「ひ」が「う」となる。例へば

歌ひて遊ぶ が 歌うて遊ぶ

となる如きである。

撥音便

バ行・マ行の各四段活用及びナ行變格活用の動

詞がてに連る時、その連用形「びみ」に「が」撥音の「ん」に變る。例

へば、

飛びて火に入る が 飛んで火に入る

樂みて出で行く が 樂んで出で行く

死にて歸る が 死んで歸る

となる如きである。そしてこの場合、てはでと濁音に變るのが常である。

動詞の撥音便

動詞の促音便

○促音便 夕行ハ行ウ行の各四段活用及びウ行變格活用の動詞がてに連る時、その連用形「ち」「ひ」「り」が促音の「つ」に變じ
る。例へば、

「勝ちて喜ぶ」が「勝つて喜ぶ」

「神に誓ひて」が「神に誓つて」

「仕事に凝りて」が「仕事に凝つて」

「所用有りて」が「所用有つて」

となる如きである。

形容詞の音便

形容詞の音便 形容詞の音便には、イ音便とウ音便の二種ある。

形容詞のイ音便

イ音便 形容詞の連體形「き」「は」「い」になることがある。例

へば、

「嬉しきかな」が「嬉しいかな」

「善き哉言や」が「善い哉言や」

となる如きである。

形容詞のウ音便

ウ音便 形容詞の連用形「く」は音便で「う」になることがある。

例へば、
「美しく咲く」が「美しく咲く」
「寒くなりぬ」が「寒うなりぬ」

「美しく咲く」が「美しく咲く」

「寒くなりぬ」が「寒うなりぬ」

となる如きである。

練習一

次の文から用言の音便をとり出し、その原音を示せ。

- (1) 秋も深うなりて蟲の音も悲しう身に沁みぬ。
- (2) 夕陽に映する木の葉火の如く輝いて時に歸る鴉三つ四つ飛び行く。
- (3) 午後友を訪うて歡談し、夜は月を踏んで散歩す。
- (4) 一輪の白梅花を取つて机上の瓶にさし置けば、清香あたりに漂うて、淋しきわが身をつゝむ。
- (5) 落葉を焚いて暖をとる。風吹いて火焰舞ふ。

練習二

次の文に誤があつたら正せ。

- (1) 嶺高ふして道細く、山嶮しふして苔滑らかなり。
- (2) 朝に星を戴びて出で、夕べに月を踏むで歸る。
- (3) 進むで高等の學校に入らんか、退ひて田園に起居せんか。
- (4) 村は平和にして年を追ふて豊かになりまさる。
- (5) 歌をうたふて遊ぶ子らあり。水を手を汲むでは楽しむものあり。

第五章 助動詞の種類

助動詞の種類

助動詞はその表はす意味の上から、左の十一種に分ける。

- 受身 可能 自發 使役 敬讓 打消 時 推量
- 希望 指定 比況

受身の助動詞

受身の助動詞

「風に吹かる」人に育てらる。の如く、或る動作を仕向けられる意を表はすものを受身の助動詞といひ、るらるの二語がある。

(口語では、れるられるの二語である。)

可能の助動詞

可能の助動詞

「此刀にても切らる。」朝五時には起きらる。の如く、その動作を爲し得る意を表はすものを可能の助動詞といひ、らるの二語がある。

(口語では、れるられるの二語である。)

自發の助動詞

「故郷戀しく思はる。」亡き友を思ひ出でらる。の如く、或る動作が自然と起つて止められぬ意を表はすものを、自發の助動詞といひ、らるの二語がある。

(口語では、れるられるの二語である。)

使役の助動詞

「生徒に繪を書かす。」塵を捨てさす。「果實を取らしむ」の如く、

使役の助動詞

或るものをして、或る動作を爲さしめる意を表はすものを使役の助動詞といひ、さす、しむの三語がある。

(口語では、せるさせるの二語である。)

敬讓の助動詞

「父は花を好まる。」彼は名を改めらる。「大臣も笑はせらる。」八幡の神は石清水に鎮座せさせしめ給ふの如く、尊敬の意を表はすものを敬讓の助動詞といひ、らる、さす、しむの五語がある。但し、さす、しむは普通には、給ふの語と續けて一緒に用ひられ、單獨で用ひられることはない。

(口語では、れるられるますの三語である。)

打消の助動詞

敬讓の助動詞

打消の助動詞

「雨降らず。彼は知らざりき」の如く、動作を打消す意を表はすものを**打消の助動詞**といひ、**ずざり**の二語がある。ざりは**ず**と動詞の**あり**とが合したものである。
(口語では、ないぬの二語が打消の助動詞として用ひられる。)

時の助動詞

時の助動詞

「雪降りつ。鐘鳴りぬ。空晴れたり。書物を讀めり」の如く、動作の完了、又は進行の意味を表はすものを**完了の助動詞**といひ、**つぬたりり**の四語がある。

「昨日は雨降りき。今朝は風吹きけり」の如く、動作の過去に屬する意味を表はすものを**過去の助動詞**といひ、**きけり**の二語がある。

推量の助動詞

推量の助動詞

「明日は雨降らむ」の如く、動作のこれから後に起らうとする意を表はすものを**未來の助動詞**といひ、**む**の一語がある。
(口語では、完了及び過去はたの一語、未來はよううの二語である。)

「花散らむ。月のぼるら。春の心はのどけからまし。鳥鳴くめり。雨降るべし。風吹きけむ。空も曇るまじ。彼はピクニツクには行かじ。の如く、動作を推量する意を表はすものを**推量の助動詞**といひ、**らむらしめりべしけむまじ**の八語がある。この中まじは事實の存在しないことを推量し、じは軽く打消す意を含んでゐる。またけむは過去に於ける動作を推量するに用ひる。べしは軍人の龜鑑といふべ

推量
す
べし

希望の助動詞

し。〔可能〕進むべき時に進む〔當然〕われは朝早く起くべし。〔決意〕汝等進むべし。〔命令〕の如く可能當然決意命令の意味にも用ひる。またこの川は淺からむの如く未來の助動詞も推量の意に用ひられる。未來のことはもとく不定であるから轉じて推量の意にも用ひられるのである。

〔まし〕は推量とはいふが事實にないことをさうも思つてみるといつた假定の意をもつてゐる。「男に生れまし。かば軍人にならまし。の如き事實にないことを假定してゐる。また早く成人して有爲の材とならまし。の如く願望の意を表はすにも用ひる。』

〔口語ではらしいの一語で未來のうようもまた推量の意に用ひられる。』

希望の助動詞

「山に登りたし。海に行かまほし。の如く希望する意を表は

すものを希望の助動詞といひたしまほし。の二語がある。

〔口語では、たいたがるの二語である。〕

指定の助動詞

指定の助動詞

「我は日本男子なり。彼は學生の模範たり。の如く或る事物についての解釋や説明を述べ、又は斷定を下すに用ひるものを指定の助動詞といひなりたりの二語がある。

〔口語では、だですの二語である。〕

比況の助動詞

梅花雪の如し。の如く或るものを他のものと比べる時に用ひるものを比況の助動詞といひ、如しの一語がある。

〔猶詠嘆の意味を表はすなりがあるが今日の普通文では用ひられない〕

比況の助動詞

練習

次の文から助動詞をとり出し、その種類をいへ。

- (1) 散るを惜しむは櫻を愛する所以にあらざるべし。
- (2) 郊外に移りてより、折ふし毎の自然の姿も豊かに眺めらる。
- (3) 家に歸り着きし時は、秋まさに暮れんとする頃なりき。
- (4) 草花は余が唯一の詩料となりぬ。
- (5) ある夜野分の風烈しく吹き出でぬ。萩の株、大方折れしをれたり。
- (6) 勝敗の数既に定まれり。
- (7) 荒涼たる野には秋風吹き渡り、空には金色の鳥の翼の如き雲たゞ一片漂ひつ。
- (8) 戸外には人のけはひす、誰か尋ねて來たるらし。
- (9) 今日も人一人來らず、終日閑なり。
- (10) 明日は天氣なるらむ、さらば郊外に出掛けたしと思ふ。
- (11) 苦しき思ひをなさしむる勿れ、人に憂き目を見さずるはよろしからじ。

第六章 助動詞の接續

助動詞の接續

助動詞は主として動詞の敘述を助ける役目の語であるが、動詞その他の語に連なるには一定の規則がある。いまそれを表示すると、次の如くである。

(一) 動詞助動詞の未然形に連なるもの。

動詞の未然形に連なる助動詞

種類	受身		敬讓		助動詞	例
	可能	發	敬讓	使役		
	る	らる	す	さす	しむ	雨に降らる 人に譽めらる 人を野に立たす 朝早く起きさす 人をして行かしむ

二せ見咲
カ

しむ

希 望	推 量	未 來	打 消	
まほし	まし	む	ざり	ず
海に行かまほし	花も咲かまし	雨降らじ	風吹かざりき	雪降らず

受身のるは四段活用ナ行變格ラ行變格活用の動詞の未然形に、らるはそれ以外の諸動詞の未然形に連なる。らるがサ行變格の動詞に連なるときは、攻撃せらる「介抱せらる」の如く、何々せらるとなるのであるが、せとらとが約つてさとなり、何々さる」となることが多い。

使役のすは四段活用ナ行變格ラ行變格活用の動詞の未然形に、さすはそれ以外の動詞の未然形に連なり、しむはあらゆる動詞の未然形に連なるのである。さすがサ行變格活用の動詞に連なる時は、「満足せさす」「運動せさす」の如く、何々せさすとなるのであるが、せとさとが約つてさとなり、何々さす」といふことが多い。しむが上一段活用の動詞に連なる時は、「弓を射しむ」「親に似しむ」となる、然るにその意味を表はす爲に「射せしむ」「似せしむ」などいふのは誤である。たゞ「得しむ」だけはこれを「得せしむ」といつてもよいことになつてゐる。

受身及び使役の意味の動詞は敘述を完全に爲す爲に、例

動詞の終止形に連なる助動詞

を落しし。時「彼を諭しし。時」柱を倒しし。時などの如くなるべきであるが、落せし。時「諭せし。時」倒せし。時などといふ。これは今日は許容されてゐる。

(三) 動詞助動詞の終止形に連なるもの

種類	助動詞			例
	めり	らむ	らし	
推量	風吹くめり	雨降るらむ	花散るらし	
打消			学校に行くべし	彼は今日歸るまじ

但しこれらの助動詞はラ行變格活用の動詞には、その連

體言に連なる助動詞

體形につらなる。即ち「有りべし」「居りらむ」とは言はない。「有るべし」「居るらむ」といふ。「有る」「居る」は連體形である。

(四) 體言に連なるもの

種類	助動詞		例
	なり	たり	
指定	彼は日本男子なり	彼は彼たり我は我たり	

なりはまた體言以外に、用言の連體形にも連つて、余は朝早く起くるなり。道は遠きなり。の如くにも用ひられる。

(五) 特殊なもの

特殊なもの

種類	助動詞	例
完了	り	雨降りり 運動せり
比況	如し	雲綿の如し 汗流るゝ如し 汗流るゝが如し

りは四段活用の已然形とサ行變格の未然形とだけに連なり、その他の動詞には連ならない。

如しは體言に連なる時は「の」を仲介として連なり、用言の連體形に連なる時は、直接にも、或はがを仲介としても連なるのである。

練習

次の文に誤があつたら正せ。

- (1) 自ら解決するべし。

- (2) その文を余に讀まし給へ。

- (3) 汝は賞を受くるべし。

- (4) 一夜にして枯木に花を咲かしぬ。

- (5) 敵は遂に白旗を掲げり。

- (6) 窓より紙など棄つるべからず。

- (7) 彼の好む所に従はさす。

- (8) 恐らく彼は來るまじ。

- (9) 彼を外國に派遣せさしむ。

- (10) 父は余を許して下されまじ。

第七章 助動詞の活用

助動詞には活用がある。いまその活用の形式によつて分類すると、左の如くである。

下二段に活用するもの

ラ變に活用するもの

起る 起る 起る 起る 起る
行は 行は 行は 行は 行は
時 時 時 時 時
か かり かり かり かり

(一) 下二段に活用するもの

種類	助動詞		未然	連用	終止	連體	已然	命令
	語尾	語尾						
受身	る	れる	られ	られ	らる	らる	られ	られよ
可能自發	起る	起れる	起られ	起られ	起らる	起らる	起られ	起られよ
敬讓	さす	させ	させ	させ	さす	さする	させ	させよ
使役	しむ	しめ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
完了	つ	つ	つ	つ	つ	つ	つ	つ

(可能自發の「る」には命令形がない)

(二) 行變格に活用するもの

種類	助動詞		未然	連用	終止	連體	已然	命令
	語尾	語尾						
完了	たり	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○

ナ變に活用するもの

形容詞の如く活用するもの

(完了の「たり」過去の「けり」推量の「めり」指定の「なり」には命令形がない。「けり」は連用形を「ざり」は終止形を「めり」は未然形を缺いてある。
(三) ナ行變格に活用するもの

種類	助動詞		未然	連用	終止	連體	已然	命令
	語尾	語尾						
完了	り	り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	○
過去	けり	けり	(けら)	けり	けり	ける	ければ	○
打消	ざり	ざり	ざらん	ざり	ざり	ざる	ざれば	○
推量	めり	めり		(めり)	めり	める	めれば	○
指定	なり	なり	なら	なり	なり	なる	なれば	○
指定	たり	たり	たら	たり	たり	たる	たれば	○

(四) 形容詞の如く活用するもの

種類	助動詞		未然	連用	終止	連體	已然	命令
	語尾	語尾						
完了	ぬ	ぬ	なん	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ

特殊の活用をするもの

種類	助動詞/語尾		種類	希望		種類	比況	
	助動詞	語尾		推量	希望		比況	比況
未然	べし	まじく	未然	たく	如く	終止	べし	まじ
連用	べく	まじく	連用	たく	如く	連體	べき	まじき
終止	べし	まじ	終止	たし	如し	已然	べけれ	まじけれ
連體	べき	まじき	連體	たき	如き	命令		
已然	べけれ	まじけれ	已然	たけれ				
命令			命令					

(右の助動詞は何れも命令形がない。また「如し」は已然形を缺いてゐる)
 (五)特殊の活用をするもの

種類	助動詞/語尾		種類	推量	
	助動詞	語尾		推量	推量
未然	(ませ)		未然	まし	けむ
連用			連用	まし	けむ
終止			終止	まし	けむ
連體			連體	まし	けむ
已然			已然	ましか	けめ
命令			命令		

語形の變らないもの

種類	助動詞	語尾
未然	む	き
過去	き	す
打消	す	ぬ
未來	む	め
過去	む	しか
打消	ぬ	

(六)語形の變らないもの

種類	助動詞	語尾
未然		
連用		
終止	らし	じ
連體	(らし)	(じ)
已然	(らし)	(じ)
命令		

練習

次の文中、助動詞をとり出し、その種類、接続のしかた及び活用形をいれよ。
 (1) 吾は東海の邊に流浪ひぬ。冬の初なりければ風いたく身にしみぬ。
 (2) 名にし負ふ暖地なれば、こち吹く風も寒からず。
 (3) 巔にのぼれば十國五島を眺め得べしとほいふなる。

- (4) 小園を歩めば百日草など露に濡れそぼちて、夢いまだ醒めじと見ゆ。
可憐 下末打終
- (5) 散りたる黄葉淋しげに垣越しに眺め引る。
可憐 指推
- (6) 雨は既に止みたりとおぼしく雲間を出でけむ月の光窓に輝く。
可憐 指推
- (7) 故郷の山々、心も消え入らむばかりなつかしく思ひ出でらる。早く國に歸らまほしきものなり。
- (8) 終日霧たちこめて、野や山や、永久の夢に入りたらむがごとし。

第八章 助詞の用法

助詞
體言につくもの

助詞は所謂「テニヲハ」といひ、種々の語について思想の表現を精密ならしめるものである。今助詞を體言につくもの、用言につくもの、種々の語につくもの、の三種に分ける。

(一) 體言について、語と語との關係を示すもの。

所有格	が	鳥が鳴く里	梅が枝	わが國
主格	の	鶯の鳴く朝	山の嶺	鳥の聲
動作、目的場所	を	犬を打つ	家を出づ	路を行く
場所、系属	に	鬼に金棒	郷里に歸る	花を見に行く
共同指定並列	と	弟と遊ぶ	東京と改む	焼野原と化す
場所、方向	へ	京都へ行く	前へ進む	棚へあぐ
起點、比較	より	暁より始む	山より高し	
動作、場所	にて	汽車にて行く	雨にて中止す	

右の「が」のは文の主語を示し、または所有、係屬を示すに用ひられ、をは動作の目的、又は動作の行はれる場所を示すに、には物を添加するとき、又は動作の標的を示すに、とは共

同指定などの意に、へは方向や場所を示すに、よりは動作の起る物事、又は比較の標準を示すときに、にては手段や原因理由を示すに用ひられる。

用言につくもの

(二) 用言について接續をあらはすもの。

ば 雨降らば止めむ 雨降れば止めぬ

(ばは用言の未然形について假定の条件を、已然形について既定の条件を表はす)

とも 風吹くとも厭はじ 敵來るとも怖れじ

ど 言ふは易けれど行ふは難し 問へど答へず

ども 雪降れども寒からず 女なれども一步も退かず

(どもは動詞の終止形容詞の未然形について假定の条件を表はし、ど

もは已然形について既定の条件を示すに用ひる)

に 雨降るに傘もさゝず 日も暮るゝに道遠し

を 風吹くを出で行きぬ 待ちしを來らず

が 空は曇りたるが蒸暑し 問ひしが答へざりき

(に、がは用言の連體形につき、前後の文を接續し、順應しない意を表はす)

て 秋風起ちて白雲飛ぶ 雨降りて日暮る

つゝ 泣きつゝ語る 頭を搔きつゝ詫ぶ

(つゝは動詞の連用形につく、つゝは動作の繰返される意を表はす)

(三) 種々の語について意味を添へるもの

は 花は美し 稀には來る 彼は秀才なり

も 山も海もひとしく暮る 嬉しくもなし

種々の語につくもの

他と物とを区別する
たむかひやがは
希冀

なむこそやかの連体形

第八章 助詞の用法

こそ 已然形

係結り助詞

雨ぞ美しき
こそ美しけれ

強意

ぞ 風ぞ吹く 年ぞくれゆく 何處に行くぞ
 なむ 月をなむ愛づる 雨なむ降る
 こそ 善くこそ來つれ 斯くこそありしか
 し 折しも雨風強し いつしか來らむ

疑問

又

や 風や吹きぬる ありやなしや
 風や吹きぬる ありやなしや

疑問

又

か かげる 何故なるか
 かげる 何故なるか

疑問

又

だに 月だに照らせ 見送りだにせず
 月だに照らせ 見送りだにせず

疑問

又

すら 禽獸すら恩を知る 鶯すら鳴かず
 禽獸すら恩を知る 鶯すら鳴かず

疑問

又

さへ 風さへ吹き立ちぬ 机にのみ向ふ
 風さへ吹き立ちぬ 机にのみ向ふ

疑問

又

のみ 荒れのみまさる 机にのみ向ふ
 荒れのみまさる 机にのみ向ふ

疑問

又

ばかり 今日ばかりは晴れよ
 今日ばかりは晴れよ

拾遺 28

なむこそやかの連体形

な 物を忘るな 過ちすな
 な 飛び立ちそ な來そ
 な そこに居るな
 な 飛び立ちそ な來そ なせそ

右の中はは物を標出するにもは二つ以上の物を並列するに用ひる。ぞなむこそは共に強く指示する意の助詞で、文の中に、ぞなんのある時はその文の終りを連體形で、こそのある時は已然形で結ぶことになつてゐる。しは物事を強く指示する意の助詞であるが、文の結びには關係がない。やかは疑問の助詞で、用言に連る時、やはその終止形にかはその連體形につらなるのである。また文の中に、やかのある場合は文の終りを連體形で結ぶことになつてゐる。ぞなむこそやかを係辭といひ、文の終りを連體形又は已然

係結の法則

形で結ぶ法則を係結の法則といつてゐる。
 だにすらはある物事を指示して他を言外に類推させる
 意の助詞で、だにはデモ、ダケ、デモ、セメテなどの意であり、す
 らはデモ、ヤハリ、デサヘモの意である。
 さへは一つの物事の上に更に他の物事の添ひ加はる意
 を表はす。またのみばかりは、物事のこれ以外にはないと
 いふ意を表はしてゐる。ななそは禁止の意の助詞で、なは
 う變動詞の連體形その他の動詞の終止形につき、な…そは
 間にカ、變サ、變動詞の未然形、その他の動詞の連用形を挟む。

練習

次の文から助詞をとり出しその用法をいへ。

文の成分

第三編 文章論

第一章 文の成分

(主語・述語補語)

春日うらゝかなり
 梢を渡る風の音遠く聞ゆ
 の如く、二つ以上の單語が結合して、一つの纏つた思想を表

- (1) 近き舟は行けども遠き舟は動かんともせず。
他動詞、自動詞、条件、区別
- (2) 月の光は隈なく秋風のみぞ身にはしむ。
反語、限定、場所、区別
- (3) そこひなき淵やは騒ぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪は立て。
場所、限定、係結
- (4) 死なば諸共にと誓ひしが、われのみ生きて歸れり。
場所、限定、係結
- (5) 病める身は室内の歩行だに心にまかせず。
場所、限定、係結

現してゐるものが、文又は文章である。凡そ思想が纏つた表現の形をとるには、

何がどうする (小鳥さへづる)

何がどうある (日影ほがらかなり)

何が何である (雲表に聳ゆるは富士山なり)

といふ三つの形式がある。この三つの形式の中、何がは、敘述の題目となるものを示すもので、これを主語といひ、どうするか「どうあるか」「何であるか」を表はす部分は、題目について、その状態や動作を敘述してゐるもので、これを述語といふ。

主語 主語には主として體言が用ひられる。

主語

月傾く。風烈し。雲湧く。林鳴る。

といふ各の文で、月・風・雲・林は主語であり體言である。この主語の下には助詞の「が」が附くことが多いが、右の例文の示す如く、文語では助詞のない事も多い。また

かすかに聞ゆるは水の音なり
道を謠ひ行くは小學生なり

の如く、用言の連體形も主語として用ひられる。この場合は用言の下に助詞の附いてゐるのが普通である。

述語 述語には普通に用言が用ひられる。

空曇る。風死す。蟲聲しげし。犬眠る。

といふ各の文で、曇る・死す・しげし・眠るは皆述語であり用言

述語

補語

である。この場合、右の例文の示すが如く、用言が單獨に用ひられることもあるが、また

雨既に止みたり。梅咲きぬ。風吹くな

の如く、用言に助動詞や助詞の附くこともある。また

戶外に聞ゆるは風聲なり。彼は誰ぞ

霜白きは既に初冬の朝なり。

の如く、名詞代名詞などに助動詞や助詞が附いて述語となることがある。

右の如く文には敘述の題目となるものを示すところの主語と、題目について敘述するところの述語とが必要であるが、主語と述語とさへあれば常に完全な文章になるかと

いふと、さういふわけには行かない。述語となるもの、性質によつて、これ以外のものが必要になる。

百花春を粧ふ。仁者は山を愛す。

といふ文で、「百花粧ふ」「仁者は愛す」といつただけでは主語と述語とは備はつてゐるが、思想が十分に表はされてゐるとはいへない。即ち「粧ふ」「愛す」といふ述語の動作を受ける「春を」「山を」が必要である。また

われ菊に肥料を與ふ。蛙水中に飛び込む。

といふ文で、「われ肥料を與ふ」「蛙飛び込む」だけではやはり十分な言ひ方ではない。「與ふ」「飛び込む」といふ動作の係るものを示す語、即ち「菊に」「水中に」といふ語が必要である。また

補語

人は花に送られ花に迎へらる。われは吟興を鼓せらる。といふ文で、人は送られ迎へらる「われは吟興を鼓せらる」といふだけでは敘述が十分であるとは言へない。矢張「花に白雲に」といふ語が必要である。述語の敘述を補足してその敘述を完全ならしめる爲の語を補語といふ。補語には主として體言が用ひられる。山雪を帶ぶ風林を渡る。われこの雲を日和雲と名付く。風景みるく繪となりゆく。一天黒雲に覆はる。

天風をして雲霧を拂はしむ。

紅葉火より紅なり。

の雪林雲日和雲繪黒雲風雲霧火はいづれも名詞である。

そしてこれにをにとをしてよりなどいふ助詞が附いて補語になる。また

學生は勉強するを本分とす。

の如く、用言の連體形もまた補語として用ひられる。主語・述語・補語を文の主要成分といふ。

練習

次の文の主語・述語・補語をとり出し、それが如何なる品詞から成立つてゐるかを示せ。

- (1) 猫のそくくと庭を過ぎゆく。 主 補述
- (2) 寒さ骨に徹る。朝日薄く南の窓を射る。午後日影はがらかなり。 主 補述 主 補述 主 補述
- (3) 佐保姫春を司り立田姫秋を司る。佐保姫は優婉なり立田姫は清淑なり。 主 補述 主 補述 主 補述
- (4) 秋の夕陽は赤く野を染む。 主 補述
- (5) 美しきは人に愛せられ清きは人に尚ばる。 主 補述 主 補述
- (6) 言ふは易く行ふは難し。 主 補述
- (7) われは世の人の偽多きをにくむ。 主 補述
- (8) 雲無きは此頃の例なり。 主 補述
- (9) 雪は庭に残り鶯一羽空に飛ぶ。 主 補述
- (10) 時雨しめやかに林を過ぎ落葉の上をわたり行く。 主 補述

第二章 文の成分 (修飾語)

文章は主語述語補語の三つの主要成分によつて構成されるが、また複雑な思想を表現するには、修飾語を必要とすることが多い。

春の雨しとくと降る。日うらゝかに昇りぬ。

細かき雪しきりに降る。

右の文で、「春の細かき」は主語の「雨雪」について、いつの雨であるか、どんな雪であるかを言ひ添へ、「しとくと」「うらゝかに」「しきりに」は、それく述語についてその動作の模様を詳しく言ひ添へてゐる。また「月は澄みたる空に懸る。」「われは静かなる山里に至りぬ。」

被修飾語

の如く、澄みたる「静かなる」は補語である。空山里について、それらの有様を言ひ添へてゐる。斯く主語述語補語について、それらの意味を修飾してゐる語を修飾語といふ。修飾語に對して修飾限定される語を被修飾語といふ。修飾語と副詞的修飾語とに分ける。

修飾語と副詞的修飾語とに分ける。
烈しき風吹く。
巨萬の富を積む。

の如く、體言の主語補語を修飾するものは、形容詞か又は形容詞のやうに用ひられるものであるから、これを形容詞的修飾語といひ、

形容詞的修飾語

副詞的修飾語
形容詞的修飾語
となるもの

露、ころ／＼と落つ。
霜柱、白銀の如くきらめく。

の如く、述語を修飾するものは、副詞か又は副詞のやうに用られるものであるから、これを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語となるものは左の三種である。

一、動詞形容詞の連體形

流るゝ水。 さゝやく聲。 白き花。 烈しき戦

二、體言及び動詞に助動詞の連體形をついたもの

日本男子たるもの。 叔父なる人。
曇りたる空。 行きける人。 歸れる父。
花の如き顔。 雲霞の如き大軍。

副詞的修飾語となるもの

三、體言の下に助詞の「が」「つ」などの附いたもの
浪の音。面白の夜。松が枝。天つ少女。

副詞的修飾語となるものは左の三種である。

一、本来の副詞
雨既に止む。花ごとく散る。徐ろに語る。

二、體言に助詞のついたもの
雪と散る。束の間に過ぐ。年々に榮ゆ。

三、用言に助詞の附いたもの
死すとも歸らず。歴史を見るに驕れるものは亡ぶ。
暗けれど出でゆく。

修飾語は形容詞的副詞的の何れも修飾限定すべき語が同

じである場合は、二つ以上併列して用ひられる。

吹き抜けて行く涼しき風

門内の眞紅の芙蓉。

砲聲遠く近く聞ゆ。

修飾語は修飾される語の上にあるのが普通であるが、時には修飾語と被修飾語とを他の語句が隔てゝあることがある。

文では主語とそれに附く修飾的成分とを一括したものを、即ち叙述の題目となつてゐる部分を主部といひ、補語述語とそれらに附いてゐる修飾的成分とを一括した、即ち題目に對して叙述の役目をしてゐる部分を述部といふ。

主部
述部

涼しい風が、ゆるやかに室内に流れ込んで来る。
 霜を帯ぶる夜の蟋蟀の聲は、ほそくとわが枕邊にお
 とづる。

練習

次の文から修飾語をとり出し、何れの語から成立つてゐるかをいへ。

- (1) 雲雀が返る初春の空に鳴く。
- (2) 藪鶯の初音耳珍しく響く。
- (3) 舟は霞たなびく島々の間を進む。
- (4) 青色の星微かに光る星瞬く星總て秋の夜空を彩る。
- (5) 南北に横たはる洋々たる銀河の流れは冬の夜空の「偉觀なり」。

第三章 文の成分 (提示語と獨立語)

提示語

不忍の池、詩人之を小西湖といふ。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

西郷・木戸・大久保これぞ維新の三傑なる。

右の文に於ける「不忍の池」「大日本帝國は」「西郷・木戸・大久保」などは、下の文に叙述されるべき或る部分を、人の注意を惹く爲に、特に文の冒頭に提示し、下の文のこれらの本來あるべき所には、之をこれぞなどいふ代名詞を置いて之に代へてゐる。この本來あるべき普通の位置から引離して、主語のやうな形で、特に文の冒頭に掲げ出した語を提示語といふ。提示語は形の上から見ると、文の構成に何の關係もないやうであるが、意味の上からは矢張下の文の一つの成分と

獨立語

なつてゐる。提示語には、
 東海の樂土、そはわが故郷なり。
 の如く主語を提示したものと、
 雪塊の如き菊花、われは之を愛す。
 の如く補語を提示したものと、
 向ふに見ゆる高き山、我が家はかの山の麓なり。
 の如く修飾語を提示したものとある。
 故郷の山河よ、我は永久に汝を忘るることあらじ。
 やよ月よ、永へにその歩みをとめよかし。
 右の故郷の山河よ、やよ月よは共に呼び掛けた語である。
 あはれ、果敢なき世なるかな。

悲しきかな、我が力は彼には及ばざりき。

否、鈴蟲の鳴けるなり。

などの「あはれ」「悲しきかな」は感動を表はす語で「否」は應答の語である。

われにも親しき友ありき、されども、彼は病の爲に世を去りぬ。

われは呼びぬ、然れども、彼は答へざりき。

の「されども」「然れども」は接續詞である。

右の文中の呼び掛ける語、感動を表はす語、應答の語、接續詞は、文の主語でも補語でも述語でも修飾語でもない。このやうに文の他の成分に直接の關係のない、獨立したものを

獨立語といふ。

練習

次の文から提示語・獨立語をとり出せ。

- (1) すは敵機襲來せり。
- (2) いかにも御前、父上はいづくにおはしますぞや。
- (3) 西郷南洲、余は久しく彼に私淑せり。
- (4) あはれ、ことしの秋もいぬめり。
- (5) 懐しの友よ、我は君の前途に榮光と祝福とのあらんことを祈る。
- (6) きりつゝすよ、いたくな鳴きぞ。
- (7) 待望の春、それは今われらが世界に訪れ來れるなり。
- (8) 太郎よ、南國の冬はいかに。

第四章 文の成分の位置

(主語) (述語) 水、流る。 (主語) (述語) 小鳥、囀る。

右の例文の示す如く、尋常普通の文にあつては、主語は他の主要成分よりは上に、述語は下に置かれるのが順序である。また

(主語) (補語) (述語) 滴聲軒をめぐる。 (主語) (補語) (述語) 月西に傾く。

の如く、文の中に補語のある場合は、主語と述語との中間に置くのが普通である。そして形容詞的修飾語は、形容される主語・補語の上に置かれ、副詞的修飾語は修飾される語の上にあるのが普通である。

文の倒置

籬畔の老松は、臥龍の影を、清淺の水に横たふ。
(修飾) (修飾) (修飾)

一、脈の清香骨に徹す。
(修飾)

春漸く老いんとす。

文の倒置 以上は、國語の表現に於ける文の成分の普通
 の位置について述べたのであるが、文の中の興味を中心と
 なつた部分、又は重要な部分を眞先に掲げて、他の部分を後
 にし、或は語調を強めたり整へたりする爲に、普通の順序を
 變更することがある。之を文の倒置といつてゐる。例へ
 ば、高山を見た時、雄大な感じが胸を打つたとする。すると
 雄大であるといふ感じを強く表現する爲に、

雄大なるかな山容。
(補語)

文の倒置の種類

といふが如きである。

文の成分の倒置には次の如き種類がある。

一、述語を文の始めに置くもの。

可憐ならずや、福壽草。
(述語) (主語)

思ひきや、君と此地にて會はんとは。
(述語) (補語)

二、補語を文の始めに置くもの。

わが庭に、秋は訪れぬ。
(補語) (主語) (述語)

人生の孤獨なる姿を、われは沁みぐくと味はひぬ。
(補語) (主語) (述語)

屋後に、一株の銀杏あり。
(補語) (主語) (述語)

三、副詞的修飾語を文の始めに置くもの。

寂然として、彼は佇めり。
(修飾語) (主語) (述語)

(修飾語) (主語)

いち早く彼は叫びぬ。

(修飾語) (主語)

ひそかに秋は忍び寄りぬ。

四、補語が文の終りにあるもの。

(主語) (述語)

誰かいふ狭くして陋なりと。

(主語) (述語) (補語)

彼は捕へぬ荒鷺を

五、修飾語が文の終りにあるもの。

(主語) (述語) (修飾語)

鐘は鳴る山寺の。

(主語) (述語) (修飾語)

眼は光る爛々と。

練習

次の文の成分の順序を述べよ。

(1) 我は想はざりきかゝる憂き目に遭はんとは。

(2) 白き花は舞ひぬちらくくと。

(3) 金色の小さき鳥の形して銀杏散るなり夕日の丘に。

(4) 聞けかの鐘の音を。

(5) 驀地に汽車は走りぬ。

(6) 雙手をあげよ心ゆくまで。

(7) 春は訪れぬ野に山に。

(8) うらめづらしや秋の初風。

(9) 見よ彼方の空を。爛々として朝日は昇りそめぬ。

第五章 文の成分の省略と併置

文の成分の省略

纏つた思想を表現する爲に、文に主語・述語・補語の必要なことは言ふまでもないが、無駄を省くとか、印象を強めるとかいふ關係上、或る成分を省略することがある。これを成

主語の省略

分の省略といふ。

成分の省略には次の三種を挙げることが出来る。

一、主語の省略

(何人も)之を見て眉をひそめざるはなし。

(汝)早く起きよ。

(われは)彼岸や、過ぎし頃と覺ゆ。

(主語が省略されるのは、自分を表はす場合、命令禁止の文で相手を表はす場合、一般の人を指す場合、主語が前文の主語と共通の場合などである。)

述語の省略

二、述語の省略

昨日は終日雨なりき。今朝も。(雨なり)

月に叢雲(かゝり易し)

光は東方より(始まる)

(述語が省略されるのは、上文の述語と共通の場合、又は前後の関係から無くても容易に推察の出来る場合である。)

三、補語の省略

神よ願くは(われに)幸ひを與へ給へ。

敵機(わが軍に)撃墜せらる。

(補語が省略されるのは、自分又は相手を表はす場合、特定のものを表はす場合、又は文の前後の関係から容易に推察の出来る場合である。)

文の成分の併置 主語は述語を同じうする場合に、そして

述語は主語を同じうする場合に、補語は主語と述語とを同じうする場合に、それら二つ以上用ひられることがあ

補語の省略

文の成分の併置

主語の併置

る。これを文の成分の併置といふ。

主語の併置

野も山も皆暮れはてぬ。
天人ともに怒る。

右は主語を併置した例であるが、主語を併置するには、単に主語を重ねることもあり、また助辭や接續詞によつて接續することもある。また主語を併置した場合は、その下に、みなすべてともに何れもなどいふ總括する語を用ひることがある。

述語の併置

鳥は歌ひ且さへづる。

述語の併置

雷は光りとぶろく。
寄る波はわれて碎けて裂けて散る。
右は述語を併置した文の例である。述語はまた補語と共に併置される。(汽車は山を越え野を横切りて進む)。

補語の併置

秋は野に山に人の心を誘ふ。
既に川上にも川下にも人影を見ず。

右は補語を併置した例である。補語を併置するにも、單に補語を併置する場合もあれば、助詞や接續詞によつて接續することもある。

練習

補語の併置

次の文に成分の省略又は併置があつたら説明せよ。

- (1) 銀のつぶての如き雨は、落葉を叩き菊花にかゝり、暫く降りてやまざりき。
- (2) 家を出で、野を歩み林を訪ふ。
- (3) 屋外の風聲忽ち遠く忽ち近し。
- (4) 青色の星、微かに光る星、瞬く星、それら總ては天上の一點にて競ふが如く光り輝く。
- (5) 墓碑は淋しく春風に秋雨にさらされたり。
- (6) 子供らは野に岡に嬉々として戯る。
- (7) 守れ帝都の空を。
- (8) 落葉松の林の道は、われのみか人も通ひぬ。ほそく、と通ふ道なり。さびく、といそぐ道なり。
- (9) 山川に山川の音。落葉松に落葉松の風。
- (10) 午前十時出頭すべし。

第六章 節

節

主語と述語又は主語・述語・補語から成る完全な一つの文が、他の文の一部分となつてゐるものを、節といふ。

木の葉落ち盡したる庭に寒き風吹く。

風爽かなる空に日章旗翻る。

右の文の「木の葉落ち盡したる」(主語)「風爽かなる」(述語)は、共に主語と

述語とを有つた完全な文であるが、「庭」「空」を修飾するに用ひられ文の一部分となつてゐる。かうしたものが節である。

節には主語節・述語節・補語節・修飾節・對立節などがある。

主語節の主語として用ひられるものをいふ。

主語節

補語節

暴風の荒れ狂ふは凄じ。

笑聲歡語の聞ゆるは賑やかなるものなり。

朝日うらゝかに昇るは心地よし。

補語節 補語として用ひられるものをいふ。

われは遠雷の轟くを聞く。

庭前の萩は秋の來たるを待つ。

人々は道の悪しきに惱む。

主語節補語節は共に節が準體言として用ひられてゐるもので、節の述語が連體形になり、それに種々の助詞が附いてゐる。

述語節

述語節 述語として用ひられてゐるものをいふ。

夜は月明かなり。

空は片雲なし。

遠く聞ゆる音は風の林を渡るなり。

彼の氣性は秋霜の烈々たるが如し。

述語節には「月明かなり」「片雲なし」の如く、節そのものが述語である場合と、「風の林を渡るなり」「秋霜の烈々たるが如し」の如く、節に指定の「なり」「比況の「如し」の附いたもの、即ち節が述語の一部をなしてゐるものとある。

修飾節

修飾節 修飾語として用ひられてゐるものをいふ。

月清き夕蟲聲繁き野を歩む。

久しぶりに日うらゝかなる朝を迎へぬ。

從屬節

月なき夜半は甚だ氣味わるし。
飛行機飛鳥の翔るが如く飛ぶ

修飾節には形容詞のやうに用ひられてゐるものと、副詞の用をなしてゐるものとある。
以上の節は何れも文の一成分として用ひられてゐるもので、文に從屬してゐる節である。故に之等を從屬節ともいふ。

對立節

對立節 二つ以上の節が對等の資格で結合され、一方が他の一方に從屬してゐないものをいふ。

山高く、水長し。
雨は愈募り、風は益狂ふ。

秋風吹き立ち、白雲飛ぶ。

對立節の中で言ひ切つてしまはず、他に連絡するものは、述語の部分がある形をとる。即ち述語が動詞である時は、連用形となり、形容詞である時は連用形、又はこれに「して」を附けたものとなり、形容動詞の時は「月明かに」「星稀なり」「月明かに」「星稀なり」「月明かに」にして「星稀なり」の如く、その語幹に「に」「にて」「にして」を附ける。

(以上の外、提示語、獨立語なども節の形をとることがある。)

練習

次の文から節をとり出し、その種類を述べよ。

- (1) 地は霜柱白銀の如くきらめく。
- (2) 青煙地を這ひ、月光林に碎く。

- (3) 暮色漸く至り、林影漸く遠し。
- (4) 遠雷の轟くが如きは砲聲なるべし。
- (5) 鶯の歌は佐保姫の歌へるなり。
- (6) 田植歌の流るゝ畦道を散歩す。
- (7) 初秋の風そよ／＼と音づるゝ頃は、朝日に匂ふ稻穂いと美し。
- (8) 葉落ちたる白樺の林天にそり立つ。
- (9) 秋蟲のたえ／＼に泣くはいと心細し。
- (10) 海邊に立ちて月光の碎くるを見る。
- (11) 夜半眠りより覺めて、遠くの林に風の渡るを聞く。
- (12) 時雨の過ぐる音枕邊に聞ゆ。
- (13) 遙か脚下に谷川の流るゝ音するを聞く。
- (14) 梅咲く庭に犬靜かに眠る。
- (15) 田面たのめに水溢れ、林影倒さまに映れり。

第七章 文の構造上の種類

文の構造上の種類

二文法上の形式に於て、**主語**と**述語**との關係がたゞ一回しか成立してゐないか、或は二回以上成立してゐるか、また主語と述語との關係が二回以上成立してゐる場合、その一方が、他の文の一部分となつてゐるか、或は對等の資格で相對立してゐるかの區別によつて、**文**を**單文**、**複文**、**重文**の三種に分ける。

單文 文法の形式上、主語と述語との關係がたゞ一回しか成立しない文をいふ。

寒き風、吹き過ぎ。

單文

椿の花、ほつりんと水に落つ。

天地自らしめやかなり。

新月枯林の梢の横に寒き光を放てり。

風・雨・雪・霰、かはるく訪れ来る。

余は家を出て野を歩み林を訪ふ。

墓所の山も野も川も蓮華草の田も水車も神社も、さな

がら春の繪の如く横たはれり。

右の例文のなかには主語が幾つか併置されたのや、述部が二つ併置されたのものもあるが、然し主語と述語との関係がただ一回しか成立つてゐないから、どんなに多くの單語が結びついてゐても、矢張單文である。要するに單文とは節を

複文

含まない文である。

複文 主語と述語との関係が二回以上成立つてゐるもの、即ち節が文の一分となつてゐるものをいふ。

僕は横雲の切れゆく東の空を仰げり。

鶏の聲する村には、白き霧たゆたふ。

ゆるやかに朝げの煙の立ち昇る故郷の村は閑寂にして純樸なり。

椿の花水に落ちて波輪を起すは閑適の趣なしとせず。

我等は風烈しき日に浪高き海上を勢よく漕ぎ行けり。

右の例文が示すやうに複文には二つ以上の節をもつたものもある。要するに複文とは主語節・補語節・述語節・修飾節

複文

重文

などを有する文である。

重文 主語述語の関係が二回以上成立し、それごとくが對等の資格で結合してゐるもの、即ち二箇以上の對立節が連結されて一つづきになつたものをいふ。

鳥も飛び、風も舞へり。

水は清く澄み、雲は影を映せり。

枯草に置く秋霜は立田姫の威嚴を表はし、しめやかなる春雨は佐保姫の慈悲を表はす。

月傾き、風急に、雲わき、林鳴る。

練習

次の文の種類をいへ。

(1) 霜白く月清し。

(2) 立田姫の爽快なるは、そは秋の初風の心地よきが如し。

(3) 我は立田姫を敬し佐保姫を愛す。

(4) 黄なる蝶の飛び來りて垣根に花をあさるを見れば、そゝろわが魂も浮かれ出づるなり。

(5) 十月小春の日の光のどかに照り、小氣味よき風そよよと吹く。

(6) 聴き覚えのあるしやがれ聲や快活な高聲や低いか細い聲が、ごちやごちやとからみ合つて、何やら頻りにあわたゞしく話してゐる。(ロ)

(7) 自分は、懐しい人たちがまだ達者であつた頃の事がそれからそれと止めてもなく思ひ出される。(ロ)

(8) 祖母が縁先にまるくなつて日向ぼつこをしてゐる格好、父が眼も鼻も一つにして大きなくしやみをしようとする顔つき、母が襷がけで張物をしてゐる姿などが、まざりと目の前に浮ぶ。(ロ)

(9) 野は風が強く吹き、林は鳴り、武藏野は暮れんとし、寒さは身に沁む。

(10) 霏々として降りし雨はやゝ收りて雲ちぎれて沼の上にごゝかしこに漂へり。

第八章 文の性質上の種類

文の性質上の種類

文はその性質の上から左の四種に分ける。

平叙文 疑問文 命令文 感歎文

平叙文

平叙文 肯定・否定・推量・希望などの意味を有の儘に述べたものをいふ。
朝風靜かに吹き來る。
山までの距離は幾里なるを知らず。

李熟して白粉ふきたる琥珀玉の地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ。
ふと林の奥に物の落つる音す。蓋し栗の落ちたるならん。

疑問文

疑問文 疑問の意味を表はす文や、反語の意味を表はしてゐる文をいふ。

春や襲ひし、冬や遁れし。
私は一人の旅人に過ぎない。しかしこの世界に一人として遍路でない者があるか。(口)
人目を光照する事業を成就することのみ、果して事業

といひ成功といふべきか。自己人格の根柢を培ふ、是れまた貴き事業にはあらざるか、成功にはあらざるか。文中に疑問の意の語があつたからとて疑問文にはならない。

何處かに火事があつた。(口)

何時か一度は行つて見たいと思ふ。(口)

いつしかかゝる事は忘れ果てたり。

誰か人の遊びに來よかし。

などいふのは疑問文ではない。

命令文

命令文 命令又は禁止の意味を表はす文をいふ。

女はやさしく男はをゝしかれ。

軒端の梅よ春を忘るな。

感歎文

感歎文 感歎の意味を表はしてある文をいふ。感歎詞

のあるのが常である。

悲しきかな無常の春の風。

あゝ美しかりしその手よ、冷たかりしその手よ。

あはれ果敢なき世なるかな。

まあ、何といふ美しさだらう。(口)

おゝ寒い。(口)

以上、文を四種に分けるが、実際には之等の種類が一つの文の中に混合してゐる場合が多い。

練習

次の文をその性質の上から分類せよ。

- (1) 夜が明けはなれると、霧は沼の面を這つて林を傳ひ山上へ逃げあがつて行く。(ロ)
- (2) 蓮の花を愛づるに堪ふべき高潔の人、そも人の世にいくたりかあらん。
- (3) 文鳥を私は何んだか淡雪の精のやうな氣がした。(ロ)
- (4) 武藏野のやうな廣い平原の林が隈なく染つて、日の西に傾くと共に、一面の火花を放つといふのも、特異の美觀ではあるまいか。(ロ)
- (5) 行くのかなあ」と船頭は大聲で呻いた。(ロ)
- (6) 人々の何やら語る聲聞ゆ。
- (7) 親の墓の前に立つ我が心には、戀しき思ひむらくと湧き來れり。あ

- (8) はれ、我もまたかくて苔の下に入らばやと感に堪へざりき。
- (8) いかにも附甲斐なき事なり。

〔第一表〕
動詞活用表

カ	段 一 下		段 一 上		段 四		種類	
	ワラヤマバハナダタザサガカア		ワラヤマバハナダタザガカ		ラマバハナタサガカ		行名	
カ	植 ^ノ 流 ^レ 越 ^テ 求 ^ム 速 ^ク 與 ^リ 速 ^ク 出 ^ス 捨 ^テ 交 ^フ 失 ^フ 告 ^グ 受 ^ル 得 ^ル		(居)懲 ^メ 悔 ^ム 試 ^ム 見 ^ル 綻 ^ク 強 ^ク 干 ^ス 煮 ^ス 恥 ^ズ 落 ^ク 案 ^ス 過 ^ス 生 ^ク 着 ^ル		有 ^リ 休 ^ム 飛 ^ブ 問 ^フ 死 ^ス 勝 ^ル 害 ^ム 貸 ^ス 防 ^グ 開 ^ク		語幹/語尾	
ニ	ゑれえめべへねでてせせげけえ		ゐりいみみびひひにちちじぎきき		らまばはなたささがか		未然	
キ	ゑれえめべへねでてせせげけえ		ゐりいみみびひひにちちじぎきき		りみびひにちししぎき		連用	
ク	ゑれえめべへねでてせせげけえ るるるるるるるるるるるる		ゐりいみみびひひにちちじぎきき るるるるるるるるるるるる		るむぶふぬつすすぐく		終止	
ケ	ゑれるめべるねでてせせげける		ゐりいみみびひひにちちじぎきる		るむぶふぬつすすぐく		連體	
カレ	ゑれれれれれれれれれれれれ		ゐりいみみびひひにちちじぎきれ		れめべへねてせせげけ		假定	
カ(イ)	ゑ(よ)れ(よ)え(よ)め(よ)べ(よ)へ(よ)ね(よ)で(よ)て(よ)せ(よ)せ(よ)げ(よ)け(よ)え(よ)		ゐ(よ)り(よ)い(よ)み(よ)み(よ)び(よ)ひ(よ)ひ(よ)に(よ)ち(よ)ち(よ)じ(よ)ぎ(よ)き(よ)		れ(よ)め(よ)べ(よ)へ(よ)ね(よ)て(よ)せ(よ)せ(よ)げ(よ)け(よ)		命令	
ナ	段 二 下		段 二 上		段 一 上	段 四	種類	
ナ	ワラヤマバハナダタザサガカア		ラヤマバハダタガカ		ワヤマハナカ	カ	ラマバハタサガカ	行名
ナ	植 ^ノ 流 ^レ 越 ^テ 求 ^ム 速 ^ク 與 ^リ 速 ^ク 出 ^ス 捨 ^テ 交 ^フ 失 ^フ 告 ^グ 受 ^ル 得 ^ル		懲 ^メ 悔 ^ム 恨 ^ム 綻 ^ク 強 ^ク 恥 ^ズ 落 ^ク 案 ^ス 過 ^ス 生 ^ク		(居)射 ^ス (見)干 ^ス (煮)着 ^ル	(蹴)	乘 ^リ 休 ^ム 飛 ^ブ 問 ^フ 勝 ^ル 貸 ^ス 防 ^グ 開 ^ク	語幹/語尾
ニ	ゑれえめべへねでてせせげけえ		りいみびひちちぎき		ゐいみひにき	け	らまばはたさがか	未然
キ	ゑれえめべへねでてせせげけえ		りいみびひちちぎき		ゐいみひにき	け	りみびひちしぎき	連用
ク	うるゆむぶふぬづつすすぐく		るゆむぶふづつぐく		ゐいみひにきる	ける	るむぶふつすすぐく	終止
ケ	うるゆむぶふぬづつすすぐく るるるるるるるるるるるる		るゆむぶふづつぐく るるるるるるるるるるるる		ゐいみひにきる	ける	るむぶふつすすぐく	連體
カレ	うるゆむぶふぬづつすすぐく れれれれれれれれれれれれ		るゆむぶふづつぐく れれれれれれれれれれれれ		ゐいみひにきれ	けれ	れめべへてせげけ	已然
カ(イ)	ゑ(よ)れ(よ)え(よ)め(よ)べ(よ)へ(よ)ね(よ)で(よ)て(よ)せ(よ)せ(よ)げ(よ)け(よ)え(よ)		り(よ)い(よ)み(よ)び(よ)ひ(よ)ち(よ)ち(よ)ぎ(よ)き(よ)		ゐ(よ)り(よ)い(よ)み(よ)ひ(よ)に(よ)き(よ)	け(よ)	れ(よ)め(よ)べ(よ)へ(よ)て(よ)せ(よ)げ(よ)け(よ)	命令

口 語

文 語

〔第一表〕
動詞活用表

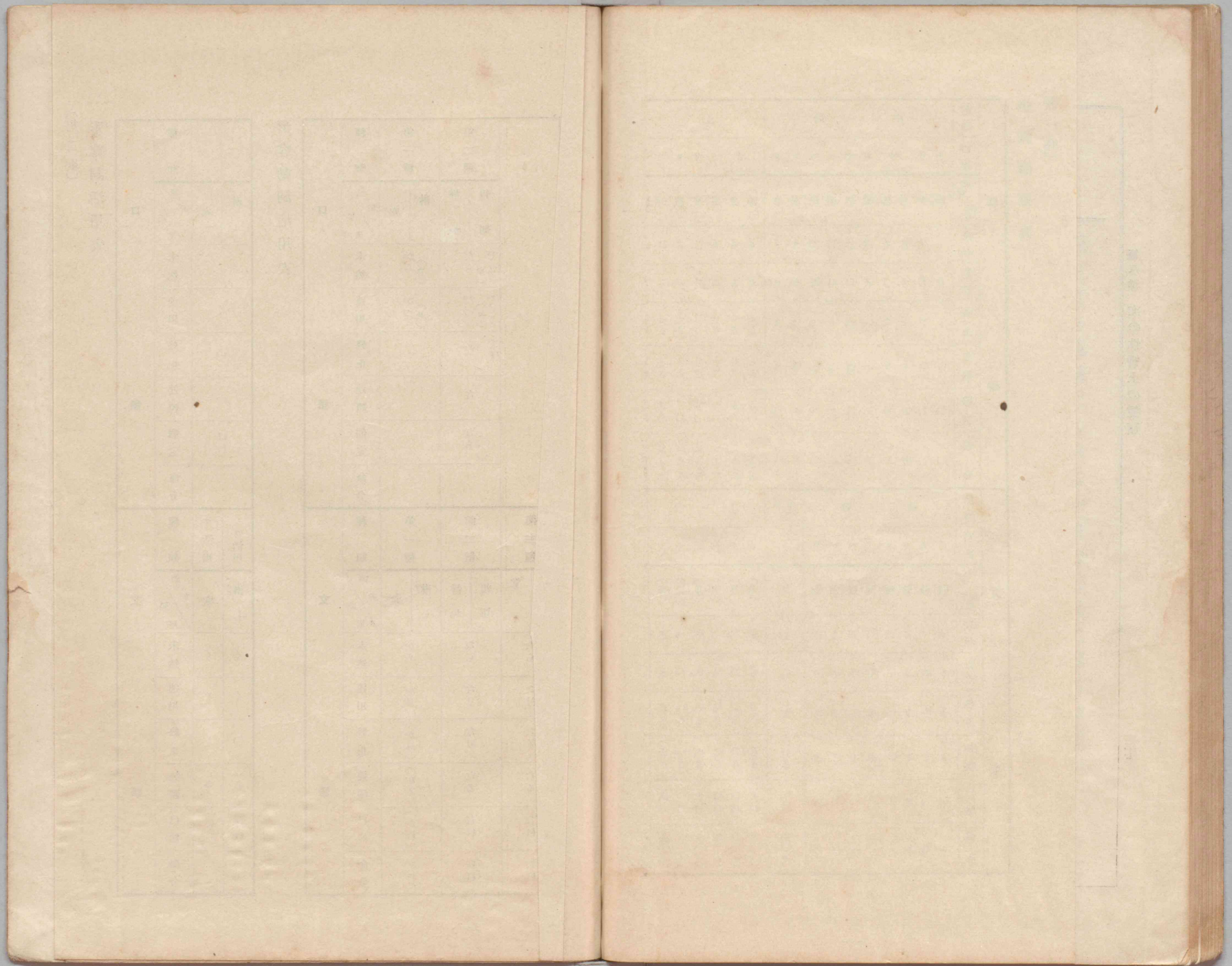
サ		カ		段 一 下				段 一 上				段 四		種類					
變		變		ワラヤマバハナダタザサガカア				ワラヤマバハナダタザサガカ				ラマバハナタサガカ		行名					
(爲)		(來)		植 ^レ 流 ^ル 越 ^ル 求 ^ル 述 ^ル 與 ^ル 連 ^ル 出 ^ル 捨 ^ル 交 ^ル 失 ^ル 告 ^ル 受 ^ル 得 ^ル				(居) 懲 ^ル 悔 ^ル 試 ^ル 見 ^ル 綻 ^ル 強 ^ル 干 ^ル 煮 ^ル 恥 ^ル 落 ^ル 案 ^ル 過 ^ル 生 ^ル 着 ^ル				有 ^ル 休 ^ル 飛 ^ル 問 ^ル 死 ^ル 勝 ^ル 害 ^ル 貸 ^ル 防 ^ル 聞 ^ル		語幹/語尾					
し	せ	こ		ゑれえめべへねでてぜせげけえ				ゐりいみみびひひにちちじぎきき				らまばはなたささがか		未然					
し		き		ゑれえめべへねでてぜせげけえ				ゐりいみみびひひにちちじぎきき				りみびひにちししぎき		連用					
する		くる		ゑれえめべへねでてぜせげけえ るるるるるるるるるるるるるる				ゐりいみみびひひにちちじぎきき るるるるるるるるるるるるるる				るむぶふぬつすすぐく		終止					
する		くる		ゑれえめべへねでてぜせげけえ るるるるるるるるるるるるるる				ゐりいみみびひひにちちじぎきき るるるるるるるるるるるるるる				るむぶふぬつすすぐく		連體					
すれ		くれ		ゑれえめべへねでてぜせげけえ れれれれれれれれれれれれれれ				ゐりいみみびひひにちちじぎきき れれれれれれれれれれれれれれ				れめべへねてせせげけ		假定					
し(せ)	ら(よ)	こ(い)		ゑれえめべへねでてぜせげけえ るるるるるるるるるるるるるる				ゐりいみみびひひにちちじぎきき るるるるるるるるるるるるるる				れめべへねてせせげけ		命令					
サ		カ		ラ		ナ		段 二 下				段 二 上		段 一 上		段下	段 四		種類
變		變		變		變		ワラヤマバハナダタザサガカア				ラヤマバハダタガカ		ワヤマハナカ		カ	ラマバハタサガカ		行名
(爲)		(來)		有 ^ル 死 ^ル		植 ^ル 流 ^ル 越 ^ル 求 ^ル 述 ^ル 與 ^ル 連 ^ル 出 ^ル 捨 ^ル 交 ^ル 失 ^ル 告 ^ル 受 ^ル 得 ^ル		懲 ^ル 悔 ^ル 恨 ^ル 綻 ^ル 強 ^ル 恥 ^ル 落 ^ル 過 ^ル 生 ^ル				(居) 射 ^ル 見 ^ル 干 ^ル 煮 ^ル 着 ^ル		(蹴)	乘 ^ル 休 ^ル 飛 ^ル 問 ^ル 勝 ^ル 貸 ^ル 防 ^ル 聞 ^ル		語幹/語尾		
せ	こ	ら	な	ゑれえめべへねでてぜせげけえ				りいみびひちちぎき		ゐいみひにき		け	らまばはたささがか		未然				
し	き	り	に	ゑれえめべへねでてぜせげけえ				りいみびひちちぎき		ゐいみひにき		け	りみびひちししぎき		連用				
す	く	り	ぬ	うるゆむぶふぬづつすすぐくう				るゆむぶふづつぐく		ゐるるるるる		ける	るむぶふつすすぐく		終止				
する	くる	る	ぬ	うるゆむぶふぬづつすすぐくう るるるるるるるるるるるるるる				るゆむぶふづつぐく		ゐるるるるる		ける	るむぶふつすすぐく		連體				
すれ	くれ	れ	ぬ	うるゆむぶふぬづつすすぐくう れれれれれれれれれれれれれれ				るゆむぶふづつぐく		ゐいみひにき		けれ	れめべへてせげけ		已然				
し(せ)	ら(よ)	こ(い)	れ	ゑれえめべへねでてぜせげけえ るるるるるるるるるるるるるる				りいみびひちちぎき るるるるるるるるるるるるるる		ゐ(よ)み(よ)ひ(よ)に(よ)き(よ)		け(よ)	れめべへてせげけ		命令				

口

文

語

語



〔第二表〕

形容詞活用表

種類		語幹	語尾	口
種類	種類			
淋し	寒し	淋し	寒し	口
				未然
く				連用
い				終止
い				連體
けれ				假定
				命令
種類		語幹	語尾	文
種類	種類			
シク活用	ク活用	淋し	寒し	文
				未然
く	く			連用
く	く			終止
〇	し			連體
き	き			已然
けれ	けれ			命令

形容動詞活用表

種類		語幹	語尾	口
種類	種類			
親切	静か	淋し	寒し	口
				未然
でせ(ウ)	だ(ウ)			連用
でし(タ)	だ(タ)			終止
です	だ			連體
	な			假定
	なら(バ)			命令
種類		語幹	語尾	文
種類	種類			
悠々	堂々	淋し	寒し	文
				未然
たら	なり			連用
たり	なり			終止
たり	なり			連體
たる	なる			已然
たれ	なれ			命令

此紙係用色紙製成

文語助動詞接續表

特 殊 な もの	體 言	詞		動			
		連 體 形 に	終 止 形 に	連 用 形 に	未 然 形 に	然 形	未 然 形
り(完了)ハ 〔サ變ノ未然形〕 〔四段ノ已然形〕 ニノミ連ナル	なり・たり(指定) ごとし(比況)	ごとし(比況) なり(指定)	らし・らむ・べし・めり・まじ(推量)	つ・ぬ・たり(完了) き・けり(過去) けむ(推量) たし(希望)	す・らる(受身・可能・自發・敬讓) す・さす・しむ(使役・敬讓) む(未來・推量) す・ざり(打消)・じ・まし(推量) まほし(希望)		

○動詞の終止形に連るらし・らむ・べし・めり・まじ・はラ變にはその連體形に連なる。
 ○過去のきはカ變サ變に連なるには異例がある。き・し・しか・と別れ、し・しか・はカ變の未然形と連用形、サ變の未然形に、きはサ變の連用に連なる。
 ○ごとしは動詞・名詞に連なるにがを仲介にして連なることがある。
 ○る・す・は四段、ナ變ラ變に、らる・さす・はそれ以外の動詞につく。

昭和十二年十一月二十六日印刷
昭和十二年十一月三十日發行
昭和十三年五月三十一日修正發行

中等新國文法（上級用）
定價五十錢

著者

竹野長次

發行者

東京市神田區錦町三ノ一四
信太壽之助

印刷者

東京市小石川區久堅町一〇八
君島潔

製本者

東京市本郷區東片町三四
水上作次郎



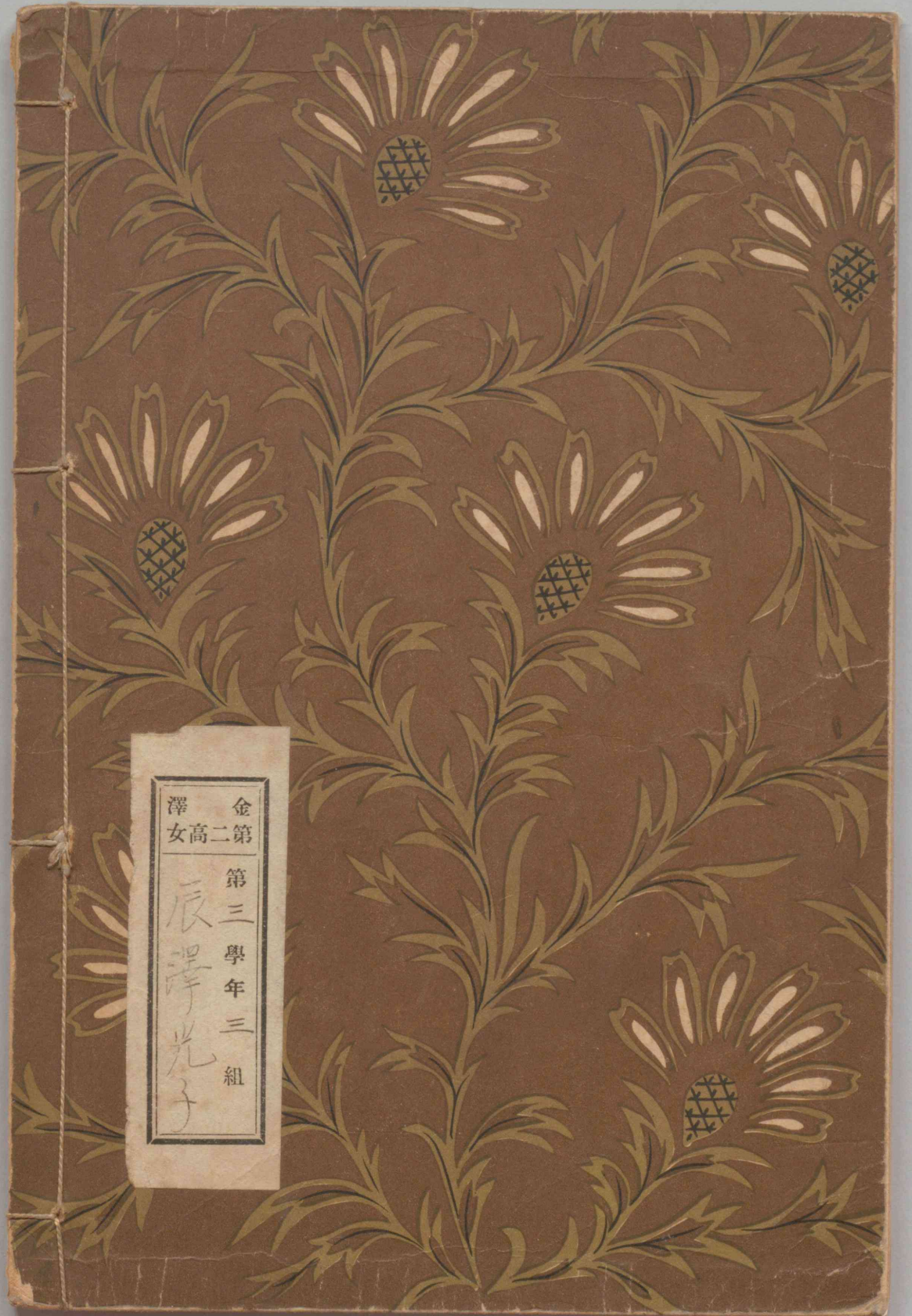
發行所

東京市神田區錦町三ノ一四
振替東京七五二九六

開隆堂書店

電話神田一八四九

刷印社會式株刷印同共



金第
澤女高二
第三學年三組
辰澤光子